

Small rectangular stamp or label at the top of the page.

六月大

あ

Handwritten cursive text in the top row of the table.

Handwritten cursive text in the middle row of the table.

Handwritten cursive text in the second row of the table.

Handwritten cursive text in the second row of the table.

Handwritten cursive text in the bottom row of the table.

Handwritten cursive text in the bottom row of the table.

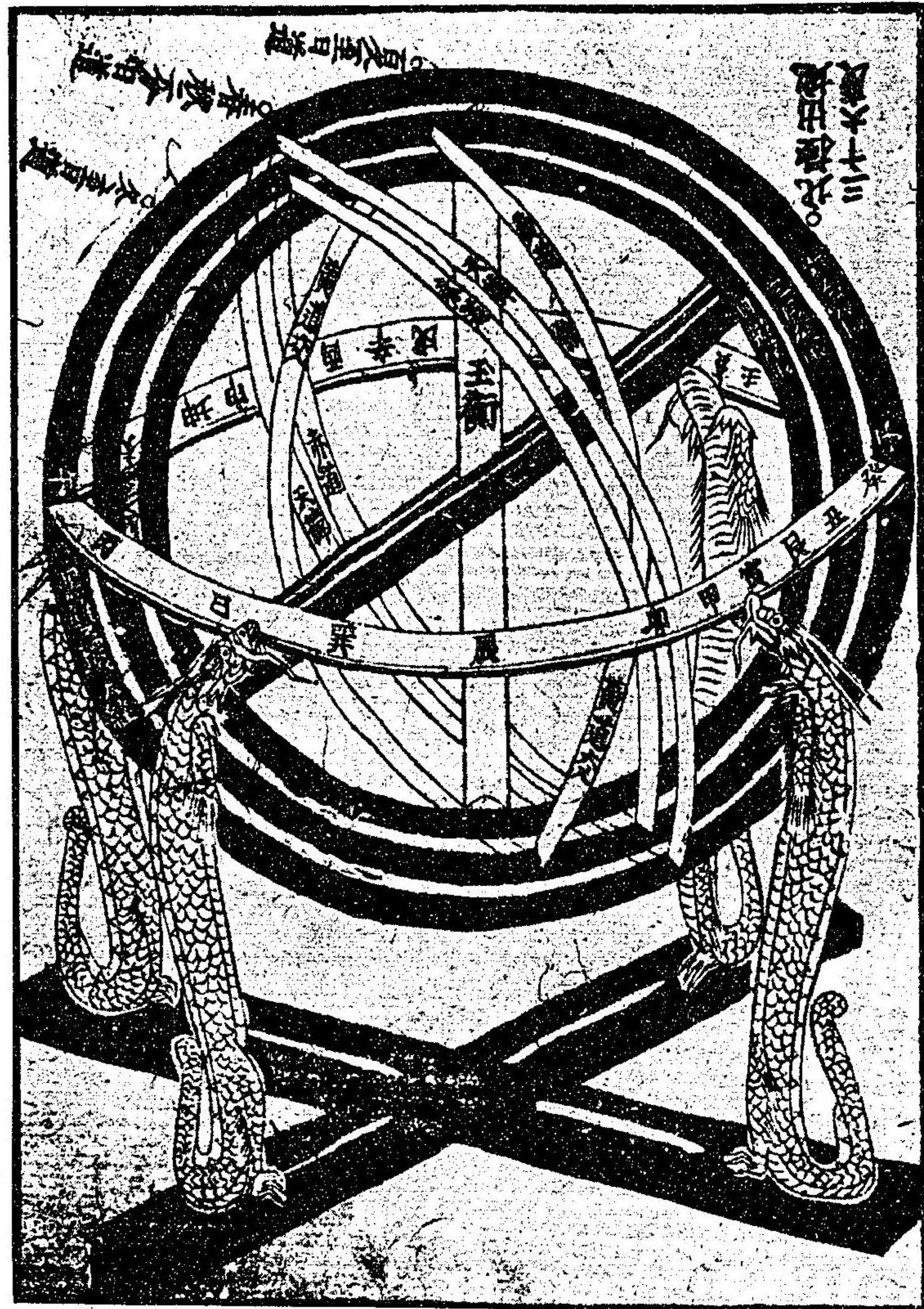
172-382



石

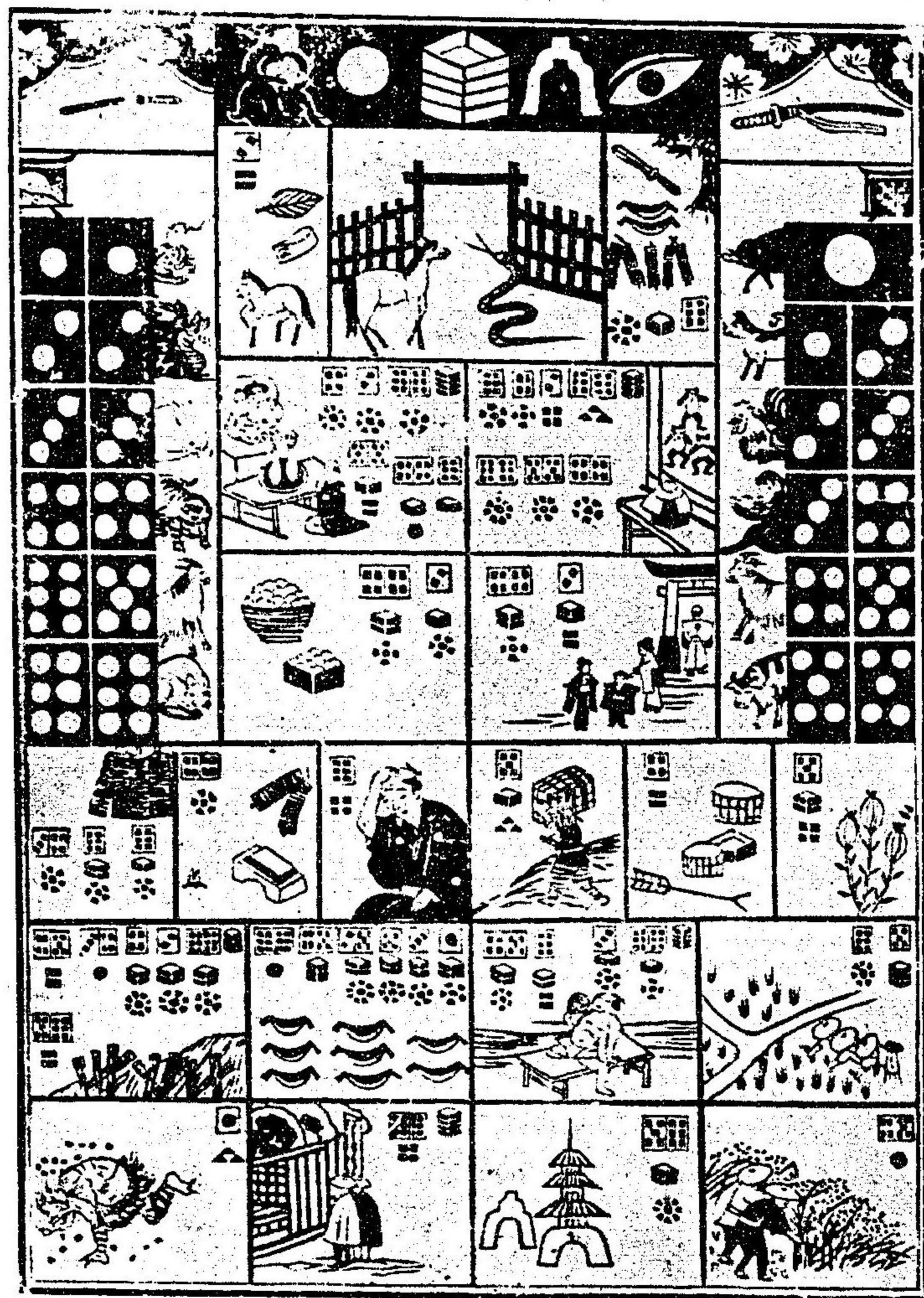
氏





圖之衡玉璣

めしせ作製てへ考を理の行運體天時の堯帝那支はと衡玉璣
 りな稱名の星の中星七斗北ともはと衡玉璣てしにのるた



南 部 の 盲 曆

古より南部地方に行はれたる盲曆は同じ地方にてはともふといふ

明治五年壬申頒曆
大學星學局

明治五年壬申頒曆
凡三百五十五日

大正の年の方
大正の月の方
大正の日の方
大正の時の方
大正の刻の方
大正の分の方
大正の秒の方

金神

正月小建 壬寅 角宿 值日

正月小 二月大 三月小
四月大 五月大 六月小
七月大 八月大 九月小
十月大 十一月小 十二月大



春分二月廿三日 時辰 卯
夏至六月廿一日 時辰 巳
秋分八月廿三日 時辰 酉
冬至十二月廿一日 時辰 亥

卯九宿 女士あり

大正の年の方
大正の月の方
大正の日の方
大正の時の方
大正の刻の方
大正の分の方
大正の秒の方

明治五年壬申頒曆
(照參面裏)

この曆は、太陽曆に變つた年、即ち明治五年の頒曆である、この曆に「虚宿値年」とあるのは、この年が二十八宿の中の虚の宿に値ふことを示したのである、正月の下に、建壬寅とあるのは、この月の暮六つ時に、北斗星の劍先が、壬の寅の方位に建つて居ることを示したのである、その下に、「角宿値月」とあるは、二十八宿の中の角の宿にあたることを示し、更に、「牛宿、金曜値朔日」とあるのは、朔日には、二十八宿の牛の宿に値ひ、又七曜の中の金曜星にあたることを示したのである。

例言六則

一 曆は、人間界といふ大きな海洋を渡る羅針盤である。故に、古より、如何なる人種でも、曆を考へ出さないものはない。かやうに、曆は、人間生活に、最重要なものであるから、曆法が改正になることがあると、その當分は、人民が氣惑ひをして、耕作などの時を誤まるやうなことがある。我國でも、明治五年に、太陰曆を廢して、太陽曆に改められた當時は、人民が、一時惑つて不便を感じたので、福澤翁は、曆日講釋を著はして、太陽曆の大要を諭されたことがある。

一 此度の、舊曆廢止には、さほど、人民は疑惑を生じないであらうが、併し、太陰曆は、久しい間、民間に行はれて居たものであるから、何となく、闇夜に燈を掲げないで、道を行くやうな感じが起るかも知れぬ。かゝる時に、曆といふものは、全體如何なる基礎の上に、如何やうに組

み立てゝあるかといふことを、大體心得て居れば、決して疑ひも、不便も起らないのである。

一 予は幼少の時から、天文地學や曆法のことには、非常な興味をもつて居て、常に、支那の曆法の書や、西洋の天文學などを讀んで、必要なことは、抜き書きして置くやうにしたが、どうも、我國には、これまで、一般の人民に、曆の組織などを知らしめるやうな、平易で、而も纏まつたものが無いので、いつか、通俗的のものを述べて見たいと思つて居た。ところが、此度、舊曆廢止といふことになつたので、民間では、不正な曆を作つて、人民を迷はすことがあるかも知れぬと心づいて、遂に、本書を編述したのである。而して、予が幼少の時に、太陽曆俗解といふ小さな本が出版せられて、大層利益を受けたことが、今も頭の中に残つて居る。それが、このやうな通俗のものを書く事にした動機である。

一 併し、今の人民の智識の程度は、維新當時とは、餘程進んで居るか、たゞ漠然たるものでは、とても世に利益を與へることは出來ない。そこで、本書は、文章と説明の方法とは、誰にでも了解が出来るやうにしたが、その説明の程度は、稍高尚なところまで進めて、中學程度の智識のある者が讀んで、十分に益するところがあるやうにした。故に一般の者も、學校の教師の参考書にも、何れにも適するであらうと信ずるのである。

一 本書雜説以下の材料は、全く石橋臥波氏から得たもので、曆日に關する迷信、五行、干支の原理及び年中行事等の、曆に必要なものを載せることが出來たのは、著者が氏に向つて、深く謝するところである。又、曆の沿革、基礎及び組織などについては、某理學士の援助を得て、誤りのないやうにすることが出來たのは、これも併せて謝するところ

例言
である。

一 本書が、福澤翁の暦日講釋のやうに、多大の利益を、人民に與へることは出来ないにしても、亦多少、世に益するところがあらば、著者の本望は達せられたのである。

明治四十二年十一月新嘗祭の日

著者誌

暦目次

發端.....二八

自然の暦—暦の字原—暦の意義—暦の必要—日本の
暦の起原—太陰暦—氣節と太陽の運行の關係—閏—
日本の暦—暦の改正—太陰暦の長所—太陰暦の廢止
曆法の本義—曆法と國民の習俗宗教との關係—曆と
五行干支

曆の沿革.....九一六

一 太陽曆.....二一八

曆の始め—一年の月と日—月の大小—ヌマ王時代の

曆

目次

五

改正—閏日—シ—ザ—時代の改正—グレゴリアン曆
(太陽曆)—太陽曆の月の名の起原

二 太陰曆

太陰曆の起原—顯瑣時代—孟春—堯の時代—睿璣玉
衡—月の大小—夏の時代の改正—漢代の六曆—漢代
の改正—太初曆—積年日法—隋唐時代—回々曆—元
代の授時曆—明代の大統曆—清代の萬年曆—日本曆
法の改正

曆の基礎

一 太陽及び地球

太陽系—太陽の大きさ—太陽の目方—地球の大きさ—地

球と太陽との距離—赤道—緯度—南北回歸線—南北
極線—子午線—經度—基點—黃道—地軸の傾き—地
球の自轉—自轉の時間—正午—世界の標準時—日本
の標準時—中央標準時—西部標準時—各地の正午を
知る方法—日時計—太陽日—平均太陽日—晝夜の長
短—晝の最短時—晝夜等分—晝の最長時—緯度と晝
の時間—東京の晝夜の時間—各地の緯度を知る方法
極星—地球の公轉—地軸の傾斜の有様—四季の別—
夏至—冬至—回歸線—近日點—春分—遠日點—秋分
一年の日數—春秋分點の變動—回歸年—各季節の長
さ—近日點の移動—回歸年の變動—十二宮—十二星
座

二 月と地球

地球と月との關係——月は地球の陪臣——月の大さ——月の距離——月の軌道——月の赤道と黄道との傾き——月の軌道と黄道面との傾き——白道——交點——月は半球のみを地球に示す——昇交點——降交點——月の軌道の有様——月の運行——恒星月——太陰月の時間——月の光——朔——恒星月と太陰月との異なる理由——月の形の變化——新月——上弦——満月——下弦——弓張月——日月の蝕——月の一章中に起る日月の蝕——地軸の動搖——一章——月の高低——月の最も高さ時——月の最も低き時——月の軌道を周る速度——潮汐の説明——潮汐の満干は月の引力に依る——潮汐満干の時間——一日の時刻

曆の組立

一 太陽曆の組立

閏年を置く規則——一日の時間——月の大小——一月一日春分——秋分——夏至——冬至——七曜の名稱——七曜の起原七曜の繰り方

二 太陰曆の組立

一年の日數——月の大小——閏月を置く理由——閏を置く法——曆元——元亘——二十四氣節——春分——清明——穀雨——立夏——小滿——芒種——夏至——小暑——大暑——立秋——處暑——白露——秋分——寒露——霜降——立冬——小雪——大雪——冬至——小寒——大寒——立春——雨水——驚蟄——土用——半夏生——入

梅—八十八夜—二百十日—社日—一元一章—紀元—
 耶蘇紀元—世紀—曆の上段中段下段—四十三年より
 行はれる太陰曆の繰り方—月齡—舊曆の日を知る法
 月の大小を知る法—閏年を知る法—中氣—月の大小
 氣節

四季及び月名

二六—三三

四季の名稱

二六—二八

春—夏—秋—冬

月の名稱

二八—三四

一月—二月—三月—四月—五月—六月—七月—八月
 九月—十月—十一月—十二月

雑説

三五—四〇

星辰に關するもの

三七—七五

五星—木星(歲星)八將神—金星(太白星)歲殺神—火星(熒
 惑)三年塞りの大將軍—大將軍遊行日—土星(鎮星)太陰
 神—歲破神—水星(辰星)歲刑神—八將軍の起原—金神
 北斗七星—北極星—斗建—月建—應星(破軍星)—七曜
 星—九曜星—歲德神—明さの方—惠方(參り)—二十八
 宿—八卦—五行—相生相尅—干支の根原—五行四季
 方位配當—陽干陰干—十干の意義—十二支の意義—
 六十支—九星—九星方位配當—九星循環—九星の根
 原—本命的殺—十二直—十二直の根原—十二運—有

卦無卦—八專—間日—十方暮—天一天上日—犯土—
庚申—三伏日—日の吉凶—六曜星

年中行事

一七—三

一月—四方拜—蓬萊島—惠方詣—初夢—門飾—屠蘇
齒固—戴餅—書初—元三—事始—元始祭—政治始—
新年宴會—御講書始—七草粥—人日—陸軍始—十日
夷子—鎧開—帳祝—年越—爆竹—左儀長—餅の粥—
鏡入—歌御會始—鏡開—孝明天皇祭
二月—紀元節—涅槃會
三月—上巳—曲水の宴—春季皇靈祭
四月—神武天皇祭—灌佛
五月—端午の節句—靖國神社例祭

六月—大祓
七月—七夕—孟蘭盆會—中元
八月—八朔—十五夜
九月—重陽—十三夜—秋季皇靈祭
十月—神嘗祭—惠比須講—酉の市—亥子祭—下元
十一月—天長節—新嘗祭
十二月—除夜—追儺—煤拂
曆日に關する迷信……………一七—三〇
結婚—年—月—日—西洋の結婚と月—葬儀—旅行—
月—曆—十三日—週日—徳日—年の豊凶—雜煮と太
箸—福の神

結論

太陰曆廢止—中陽曆

挿畫目次

貞應二年癸未假名曆 (好古日録所載) 表紙

瑤璣玉衡之圖 口書

南部の盲曆 口書

明治五年壬申頒曆 口書

第一圖 地球表面の位置 三

第二圖 軌道面と地軸の傾斜 三

第三圖 春秋分晝夜の關係 四

第四圖 夏至晝夜の關係 五

第五圖 四季の別 五

第六圖 四季の別 五

第七圖	黄道周圍の十二宮……………	五
第八圖	月の赤道の傾斜……………	五
第九圖	昇交點……………	六
第十圖	月の軌道と黄道との交叉……………	五
全	月の軌道を水面に見たる圖……………	五
第十一圖	月の軌道を縦より見たる圖……………	六
全	月の軌道を横より見たる圖……………	六
第十二圖	地球を不動として月の運行を示す……………	六
第十三圖	月の盈虚……………	七
第十四圖	一章中に地軸の動搖を示す……………	七
第十五圖	八卦配當の圖……………	一四
第十六圖	九星の圖……………	一五

發

端

乃命義和欽若昊天曆
 象日月星辰敬授人時

幾典

自然の曆

曆の字原

曆の意義

太古の住民は、まだ正しい曆を使つて居なかつた。たゞ、日の影の長短や、月の盈ちたり、虧けたりするありさまや、草木が花を著け、實を結び、葉が落ち、雪が降るなどのありさまによつて、月日のたち、四季の移りかほりを推した位であつた。この時代は、いはゆる自然の曆を利用した時代である。こゝろみに、支那の曆といふ字の出來た根本を尋ねると、尸は天幕の形で、秝は禾木といつて、菓物のなる木が二本、その下に日があるので、天幕を禾木の上に張つて生活し、木の影によつて、日の移るさまを推した意味が知られる。我國のこよみは、日の數を計へる(ヨム)といふ意味の語である。現に、南洋諸島などに住んで居る野蠻人は、今でも、ある熱帯産の芭蕉などの葉が生じ、葉が落ちるありさまによつて、一年の暮れるのを判知するものがある。

曆の必要

しかし、少しく人智が進んで來ると、月の盈ちたり、虧けたりするありさまに、深く注意するやうになり、四季の變化があるに心をとめるやうになり、一面には、水草を逐うて、食物のある處を探して、何處ともなく移住することを止めて、一定の住所を定めて、農業や牧畜などをやるやうになる。そこで、曆をつくる必要が生じて來るのである。故に何れの國を見ても、古くから、曆をもたない國民はないのである。その中で、支那には最も早くからあつたらしい。西洋では希臘時代からである。日本では、推古天皇の十二年までは、自然の曆によつて、別に曆はなかつたが、同天皇の朝に、始めて漢土の曆を用ひることになつたのである。而して、何れの國の曆でも、最初は、必ず太陰曆、月の盈ちたり、虧けたりするによつて、一月といふことを定め、それから、氣節などを割

太陰曆

日本の曆の起原

氣節と太陽の運行の關係

問

り當てるのである。ところが、月といふものは、氣節に關係しないもので、四季の別が生ずるのは、却つて太陽の地球に對する關係からである。又、一年といふことは、太陽が地球を一周する、實は地球が太陽の周圍をめぐるのであるが、をいふので、月の方を基とすると、どうしても、氣節と合はなくなるので、閏といふものを置くことになる。それでは、正當なものではないといふやうなことから、學問が進むにつれて、遂に、太陽を基とした、太陽曆といふものが考へ出されるやうになつたのである。

日本の曆

我國では、中古時代は、支那曆のまゝを用ひて居たが、近古時代、貞享元年(靈元天皇の朝、今より二百二十五年前)澁川春海といふものが、漢土元明の曆を參酌して、新たに作りし曆を用ひてから以後は、我國の風土氣候に合ふやうにしたので、農家などには、太陰曆は、最も

曆の改正

大切なものになつて居るのである。ところが去る明治五年に至つて、太陽曆を用ひることになつて、貞享曆から以來百九十年ばかりの間に發達して來た太陰曆は、こゝに廢せられることになつたのである。

太陰曆の長所

しかし、太陰曆の方にも、缺點もあるかはりに、又長所がある。第一、潮汐の満干を知るには、素人には、月の新月や満月や、出入の工合によつて推すのが便利である。それから、氣候を知るために、二十四氣節が配當してあるので便利である。特に、長い間用ひられて居たので、國民に、時を知らしめるためには、太陰曆と比較させる必要があるから、爾來三十五六年間今日に至るまで、太陰曆の月の大小などが併用せられて居たが、いよいよ、一昨年、文部省告示第二百三十號を以て、明治四十三年以後は、太陰曆は、全く廢止することにな

太陰曆の廢止

曆法の本義

つた。元來、曆法といふものは、人間の生活上に必要な氣節を知ることや、人間の歴史即ち後の記録を正確にするために、年月などを明らかにするのが目的であるから、天文學の上から割り出しさへすれば、それでよい筈であるが、しかし、國民の思想や感情や風習などが、幾分か影響して居るし、又、古から、宗教家が、曆法に關係したことがあるので、宗教上の影響も受けた形跡があるのである。彼の太陽曆に、七曜日を配當したり、紀元の基礎を耶蘇の生れた年に定めたりなどしたのは、その一例である。(現に、回々教徒は、今でも回々曆を司つて居る。)

曆法と國民の習俗との關係

曆と五行干支

支那では、年月にも、日時にも、悉く五行や干支を割り當て、之によつて、年月、日時の吉凶を定める風習がある。我國には、始めは、かやうなことは無かつたが、支那の影響を受けて、日時や方位の吉凶に

注意するやうになつた。

そこで、曆の改正があると、國民は幾分か疑ひを生ずるものであるから、一般の國民は、曆といふものは、如何なる基礎の上に組み立てられるものであるか、如何なる沿革があるかを、一わたりは心得て居る必要がある。ところが、我國には、まだ一般のものに、曆の大要を知らしめる程のものが、ないから、曆に就て、その一斑を説明し、曆に附従する迷信などを述べやうと思ふ。

曆の沿革

迎日推茨軒轅氏之洪規敬授人時陶唐
 氏之定制故帝王之事莫重於曆夫天道
 運行如環無端陰陽推移隨動而差君子
 以革治曆明時大易所說實有以也

靈元天皇 詔書

我國の曆には漢土の太陰曆と西洋の太陽曆とがあるがこれ等の
 曆は如何にして出来たものであるかといふことをこれから概略
 説明しよう。

太陽曆

西洋で一年の四季を定めたのは希臘時代のタレスといふ人であるとの事であるがしかし曆といふほどのものが出来たのは古代羅馬のロムルス王時代である。この時代は今より凡そ二千六百六七十年前で、この時の曆は一年を十ヶ月に分けて、一年の日數が三百四日であつた。

三月十一日 アブライル 三十日

三月十一日 シュニト 三十日

三月十一日 オトガスト 三十日

曆の沿革

月の大小

セプテンバー	三十日	オクトーバー	三十一日
ノーヴァンバー	三十日	デッセンバー	三十日

即ち大の月が四ヶ月、小の月が六ヶ月であつたが、この暦は、太陽の運行する時日とは、六十一日も違つてゐて、氣候と合はないので、程なく改正せられることになつた。

ヌマ王時代の改正

そこでヌマ王時代になつて、之を改正して、月が一廻轉する時日即ち二十九日二分の一に合せることにして、前の十ヶ月の外に二ヶ月を増して $29.5 \times 12 = 354$ 、 $354 - 304 = 50$ 、五十日を加へて、當時希臘に行はれて居た太陽暦の日數三百五十四日と同じやうにしようとしたが、當時の人民は、偶數を忌みさらふ風があつたので、更に一日を餘分に加へて、一年を三百五十五日とし、また、この五十一日を一つは二十九日として、*ジャンニテリ*といふ月を置き、一つは、残り

閏日

暦の沿革

の二十二日に、他の三十日の月の中から一日づつ減じて六日を得て、これを加へ、*フエブラリ*といふ二十八日の月を置くことにして、これをば、十ヶ月の後に加へたのである。この*ヌマテリ*は今の二月に當り、二十八日である。この暦は、大々四ヶ月、二百二十四日、小々七ヶ月、二百〇三日、外ニ一ヶ月、二十八日、計三百五十五日、この改正で、略太陽の運行と合するやうにはなつたが、しかし、太陽の運行する時日、三百六十五日、二分四厘二二一と比較すると、まだ十日、二分四厘二二一だけ合はないので、氣候がくるふやうになる。そこで閏日といふもの、*メルケドノウス*を置くことにした。その

法は、隔年に、二十二日を「エプラー」の二十三日と二十四日との間に置くのである。この曆は西洋紀元前四十年頃まで行はれて居たのである。三百六十五日と三百六十六日となつて、實際太陽の二運行する三百六十五日、二分四厘二二一よりは、多くなるので、シーザルの時代になつて、更に之を改正したのである。シーザルは、當時天文学の開けて居た埃及の星學者ソシゼニースに命じて、一年を三百六十五日と定め、四年毎に、二月の末に一日の閏日を置くことにして、大の月が七つ、小の月は三十日にして四つ、これに二月の二十八日を加へて、一年を三百六十五日になるやうにした。この時に、月の名の順が、現今のやうになつたのである。然るに、この曆の一年は、三百六十五日と、閏日が四年に一日あるの

シーザル時代の改正

グレゴリアン曆(太陽曆)

で、一年は三百六十五日四分の一になる。この内から太陽の一年を減くと、 $365 \frac{1}{4} = 365.25 - 365.24221 = 0.00778$ 、〇〇〇七七八といふ差が生じて来る。この差が積もると、百年目には〇、七七八となり、四百年目には、三日百分の十一となる。そこで、紀元千五百八十二年に、ローマ法王グレゴリアン十三世は、又々これを改正して、千五百八十二年十月四日の次の日を、十月十五日として、十日を加へ、これまでの差を正し、將來は、四百年の間に三年だけ閏年を省くことにした。これがいはゆるグレゴリアン曆といふもので、現在、西洋諸國や、我國に行はれて居る太陽曆は、即ちこれである。次にこの曆の計算を示さう。

$$365 \times 400 + (100 - 3) \frac{365}{4} = 365 \frac{97}{100} = 365.2425$$

$$\text{故に } 365.2425 - 365.24221 = 0.00029$$

この計算によると、四千年目に僅かに一日の差を生ずるばかりである。

$$1900 \div 4 = 475 \text{ となるを以てなり}$$

附記 露西亞や希臘や東方諸國には今でも、シーザー時代の暦を用ひて、四年毎に一日の閏を置くことにして居る。

次に、現今の太陽暦の月の名は如何して出来たものであるかといふことを説明しよう。

太陽暦の
月の名の
起原

一月を *January* としふのは、ローマの神に *Janus* としふのがあつて、すべての物の始めを司るとしふので、一年中の最初の月の名としたのである。

二月を *February* としふのは、ラチン語の淨めの月といふ意味の *Februarius* からとつたので、昔は、この月の十五日に罪をはらふ祭

を行つたのである。

三月を *March* としふのは、ローマの神に *Mars* としふのがあつて、それからとつたのである。

四月を *April* としふのは、ラチン語の *Aprilis* としふ語から来たので、これは、*Aprilio* としふば開く意で、春になつて花などが開くので、しか名づけたのである。

五月を *May* としふのは、ラチン語の *Maius* としふ語から来たので、これは、この月の一日に、ローマでは、女神の *Maias* 祭をするからである。

六月を *June* としふのは、ローマの人々は常に、天の女皇として *Juno* としふ神を拜するより来たのである。

七月を *July* としふのは、チェリアス、シーザーが、この月に生れ

たので、それを月の名にしたのである。
 八月を August オーグスト といふのは、ローマ皇帝オーガス、シーザーが、この月には、いつも大いなる勝利を得たといふので、自分の名をとつて、この月に名づけたのである。
 九月を September セプテンバー といふのは、この月が、ローマの古い曆の七月にあたるので、Septem セプテン 即ち七といふのとつたのである。
 十月を October オクターバー といふのは、ローマの古い曆の八月にあたるので、Octo オクト 八の名をつけたのである。
 十一月を November ノヴァンバー といふのは、ローマの古い曆の九月にあたるので、Novem ノヴェム をとつたのである。
 十二月を December デシマンバー といふのは、ローマ古い曆の十月にあたるので、Decem デセム 即ち十の義からとつたのである。

二 太陰曆

太陰曆の起原

支那の太陰曆は、今より四千六七百年以前、黄帝ワウダイの時代に、容成ヨウセイが曆を作つたといふのが、起原であるとしてあるが、その詳しいことは、知ることが出来ない。當時の歴史には、日や月や星の象を視て、始めて天文の書をこしらへ、又師大撓シダウダウが、北斗星ホウトウ俗に破軍星とも、七つ星ともいふの杓セウの立つて居るありさまを占つて、甲子ケウシ十干、十二支シのこゝろをつくり、容成ヨウセイが曆を作つたとしてあるが、月の盈ちたり虧けたりするさまや、星の形などは、随分早くから注意して居たには相違ないが、しかし、曆を作つたにしても、真に幼稚なものであつたのであらふ。その後、顓頊シュンキ高陽コウヤウ氏の時代に、始めて曆を作つて、孟春モウシュンを以て歳の始めとしたといふことがあるが、この時代には、人民に用ひさせるやうなものを作つたのであらふ。孟春といふのは、北

顓頊時代

孟春

魏の時代

斗の杓が天の寅の方位を指す時をいつたので、この時を正月として、歳の首としたのである。その後、官も廢れ、曆法も固より正しいものでないのて、氣節と合はなくなつて來たから、堯の時代になつて更に、稍精密な曆を作つて、人民に耕作などの時を知らしめたといふことである。この時義和をして、天體の象を作らしめたのが、璿璣玉衡センギョクヨウコウといふもので、本書の首めにある圖のやうなものであつたとといふことである。而して、當時は、一ヶ月を二十九日と三十日とにしたものゝ如く、宮庭に蕢荻カガミナといふ草が生えて、十五日以前には、日々一葉づゝ生じ、以後は、日に一葉づゝ落ちる。もし月が小時は、一葉が萎んで落ちない。これによつて、朔日を知つたといふので知られるであらふ。これは固より、あてにならぬ話であるが、とにかく、月の形が次第に變化して、朔日から新月、新月から満月と

璿璣玉衡

月の大小

夏の時代の改正

いふやうになるので、これを觀察して、日や月や、年のことを定めたのであらふ。なほ、閏月を置くことも定めたといへば、曆法も稍見るべきものになつて居たらしいのである。

漢代の六

それから、夏の時代になつて、曆法が改正せられたらしい。その曆法は、詳かには知ることが出來ないが、一年を三百六十四日とし、一ヶ月を三十日とし、閏月を置かないで、閏日を置くこと、三十年ごとに凡そ十一日の差が生ずることを示してあつたらしい。とにかく、漢の時代には、六つの曆があるといふ名が記されて居て、黄帝曆、顓頊曆、夏曆、殷曆、周曆、魯曆といふことが見えて居るので、様々な曆法が行はれたことが知られる。

漢代の改正

ところが、漢の時代になつて、從來の曆は、氣節と合はないので、新曆を作らせた。その時には、やはり、北斗の杓が、天の寅の方位に在る

太初曆

月を歳の始めと定めて、元封七年(紀元五百五十七年)にこれを行ふことにして、その年を太初元年とし、その曆を太初曆と名づけた。これが曆に、何々曆と名の付くやうになつた始めてある。この太初曆は、太古以來の曆を大改正したもので、その法も餘程精密になつて來たのである。先づ、冬至の夜半に、日月、五星が、珠をつらねたやうに會合する時を計算して、之を曆の本元として、それから年數を積もつてゆく、之を積年の法と名づける。又、日法といつて、月の一周期を日數にて計算する(一日を單位とする)ことにして、日や月の運行、一年、一月、晝夜、四季の別などを計算したが、随分面倒で、且つこの曆も、なほ實際の日月の運行と差を生じて、氣節と合はなくなつて來たのである。

隋唐時代

その後、隋唐の時代には、回々曆といつて、西洋の古い太陽曆のやう

積年日法

回々曆

元代の授時曆

な曆も傳はつて來て、曆法は次第に精密になつたが、一方には、どうしても、氣節と曆面とが相違するやうになるので、屢改正をして、元の時代には、授時曆といふ曆を作つた。この時は、積年日法は、年代が經つだけ何萬といふ多くの數になつて面倒であるために、表木を立て、日晷の長短變化などによりて、太陽の運行する度をはかり、氣節を定め、一年を三百五十五日有奇とし、一月を大小に分ち、大は三十日、小は二十九日、朔は、日月、地球の會合する時にして、月の大を定めるには、十二ヶ月の中、七ヶ月を大、五ヶ月を小として、(四大三小の法といふ、七ヶ月の中、四ヶ月は大、三ヶ月は小なれば、之を十二月に比例すると、七大五小になる)十八年餘約十九年に七閏を置くことにした。

明代の大統曆

更に明の時代に回々曆を參考して、大統曆を作つたが、その後、再び

清代の萬年曆

之を改正し、清の時代になつて、三たび改正して、光緒帝光緒八年（日本明治十五年）に萬年曆を用ひることにした。これが今日行はれて居る支那の太陰曆である。漢の時代から曆法を改正するところが、凡そ五十一回ばかりである。

日本曆法の改正

次に、我國の曆法の沿革の概要を示すと、欽明天皇十五年甲戌の年（神武天皇即位紀元千二百十四年）百濟から、易博士王道良、曆博士王保孫が來た。これが漢土の曆法が、我國に渡來した始めて、その後五十年ばかり後、推古天皇十年十月に百濟の僧觀勒が、曆術、天文などの書を持つて來たので、陽胡史の祖玉陳が、曆法を學び、大友村主高惣が天文を學び、十二年甲子正月、神武天皇即位紀元千二百六十四年）に至つて始めて曆日を用ひることになつた。それから後の改正を示すと次の如くである。

支那曆遵用時代

- 元嘉曆 七 年 間（推古天皇十二年）
- 儀鳳曆 六十六年間
- 太衍曆 九十三年間
- 五紀曆 五 年 間
- 宣明曆 八百二十三年間

國曆推歩時代

- 貞享曆 保井春海造 七十年間
- 寶曆曆 安部泰邦等造 四十四年間
- 寬政曆 高橋至時等造 四十四年間
- 天保曆 澁川景佐等造 三十年間
- 太陽曆 業列互利造（明治六年以後）

改曆の詔

この太陽曆は、明治五年十二月三日を以て、明治六年一月一日とし、
たので、當時次の詔書を御下しになつた。

朕惟ふに、我邦通行の曆たる、太陰の朔望を以て、月を立て、太陽の
纏度に合す。故に二三年間必ず閏月を置かざるを得ず。置閏
の前後時に季節の早晚あり。終に推歩の差を生ずるに至る。
特に中下段に掲ぐる所の如きは、率ね妄誕無稽に屬し、人知の開
達を妨ぐるもの少しとせず。蓋し、太陽曆は、太陽の纏度に從て
月を立て。日子多少の異ありといへども、季節早晚の變なく、四
歳毎に、一日の閏を置き、七千年の後僅に一日の差を生ずるに過
ぎず。之を太陰曆に比すれば、最も精密にして、其便不便も、固よ
り論を俟たざるなり。依て、自今舊曆を廢して、太陽曆を用ひ、天
下永世之を遵行せしむ。百官有司、其れ斯旨を體せよ。

曆の基礎

日月五星謂之七政。天地與人謂之
三才。日爲衆陽之宗。月乃太陰之象。

一 太陽及び地球

太陽曆は、太陽を基礎にしたものであるから、太陽曆の組立法を説明するには、最初に、太陽のことを述べ、それから地球との關係を述べねば、了解することがむづかしいから、先づ、それらの説明を試みよう。

太陽系

太陽や月や、その他の多くの星や、また吾人の住めるこの地球も、一つの太陽系といふ組合をなして、常に太陽を中心にして、その周圍に、他の月や地球や星が回つて居るものである。そのありさまは、丁度、人間が國をつくつて、一人の主宰者があつて、その他の人民が日々はたらいで居ると同じである。

太陽の大きさ

その主人公たる太陽は、何れの星よりも大なるもので、その直径は大凡八十六萬六千五百五哩（三十五萬三千里餘）ばかりあるとして

太陽の目方

之を地球に比較すると、凡そ地球の百九倍ばかりに當る。また目方で計算して見ると、太陽は地球の目方の三十三萬二千倍ほどに當る、圓い一つの大きな球で、地球のやうに自轉をすると共に、年々その位置を變へる。熱度は攝氏の五千度から一萬度に達する程の高熱を有つて居るといふことである。

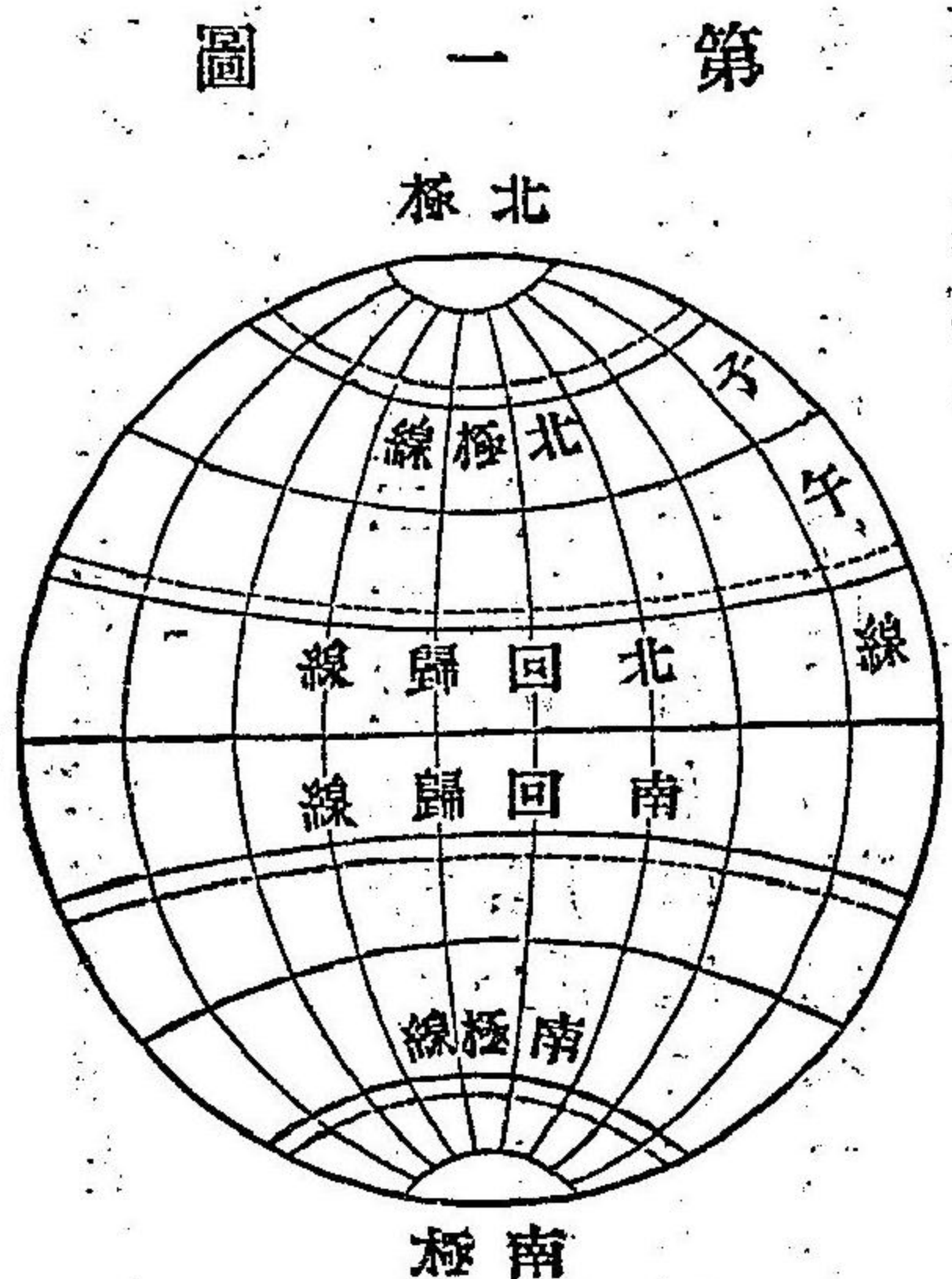
地球は太陽の周圍にあつて、常に太陽の命令に従つて晝夜となく運行して居る一つの球體であつて、中央の一番大きな處をはかると、赤道の處の直徑が一萬二千七百五十四哩四七九四(三千二百四十七里九二)ばかり、南と北との兩極の直徑をはかると、一萬二千七百十二哩一五八ばかりある計算になる、それで少し橢圓形の球體であることが知られる。

地球は、太陽の周圍を、橢圓形の道をつくつて運行して居る。その

地球の大きさ

地球と太陽との距離

太陽と地球が運行する道(軌道)との間は、地球が太陽に最も遠ざかつた時で、九千四百五十萬哩ばかり、最も太陽に近い時で、九千二百十五萬哩ばかりである。



地球の表面の位置を知るために、種々なる想像線をひく。地球の北を上とし、南を下として、北の極から南の極までを三百六十度に割ることにする。

地球の表面の位置を知るために、種々なる想像線をひく。地球の北を上とし、南を下として、北の極から南の極までを三百六十度に割ることにする。

赤道
緯度

つて、その半分を百八十度とし、その中央の最も大きな處を赤道と名づける。普通に、こゝを零度即ち基點として、それより北上の方の方へ數へるのを北緯何度、南下の方の方に數へるのを南緯何度といつて居る。丁度織物の緯と同じく横になつて居る線であるからである。

南北回歸線

赤道から北へ、二十三度半ばかりの處を北回歸線とし、赤道から南へ二十三度半ばかりの處を南回歸線と名づける。更に北極から南へ二十三度半ばかりの處に想像線をひいて、之を北極線(北極圈ともいふ)といふ、南極から北へ二十三度半ばかりの處を南極線(南極圈)と名づける。

南北極線

子午線

更に、地球の北極から南極へ線をひいて、之を子午線(經線ともいふ)と名づける。これは、北の子の方位から、南の午の方位にわたつて

經度

居るからである。この線を三百六十ひいて、地球を三百六十度に等分してその一つを一度とする。これを經度と名づける。この



第二圖



軌道面と地軸の傾斜

一度は、赤道の處では、長さが凡そ六十九哩二百八十「ヤード」ばかりあるが、赤道から南と北へ進むに従つて、次第に狭くなつて、回歸線のあたりでは、六十四哩ばかりになり、北極線のあたりでは、凡そ二十八哩ばかりになり、兩極に達すると零になるのである。現今では、イギリスのグリニッチ天文臺のところを通過する子午線を世界の子午線

基點

の基點と定めて、零度とし、これから東の方へは東經何度、西の方へは西經何度と數へることになつて居る。東經が百八十度、西經が

黄道

百八十度、合せて三百六十度になる。(第一圖參照)
それから、地軸が傾いて居るために、常に太陽の位置に對して水平になつて居る線をひいて、之を黄道と稱へる。これは一面からいへば、太陽が地球面を運行する軌道面であると想像することが出来る。而して、この線は、赤道と二十三度半ばかりの傾斜をなして交叉して居る。

地軸の傾き

地軸傾斜の周期

地球は、二通りに運動して居るが、その運行するありさまは、地球の北と南との地軸と名づける中心が、眞直でなく、平面上の垂直線に對して、凡そ二十三度半ばかりの傾斜をなして進行して居る。しかし、この傾く度は、年々少しづゝ違つて居る。最も傾きの小さい時は、二十一度五十九分、最も大きい時には、二十四度三十五分まで傾く事がある。この最小極度から、最大極度に達する年數周期

地球の自轉

は、中々長い間を要するのである。明治四十二年の春分頃は、二十三度二十七分五秒位傾いて居て、年々傾斜の度が減じてゆく時である。即ち西洋紀元一千八百年には、二十三度二十七分五十七秒であつたが、現今では、五十二秒程減じて居ることが知られる。この地球の傾斜は、これから述べる晝夜の區別や、日の長短や、四季の變化などに、大いなる關係があるのである。(第二圖參照)

地球の運動の一つは、自轉といつて、現在吾等が用ひて居る時計で、二十三時五十六分ばかりで、西の方から、東の方へ向つて獨樂コマのまはるやうに運轉して居る。これがために、晝夜の區別が生ずるので、地球が太陽に面した方は晝で、その反對の方は夜である。而して晝と夜との時間が、四季によつて長短の差があるのは、地球の軸が、常に傾いて居て、ある時は、吾等の住んで居る北半球の北の極が、

太陽の方に向いたり、ある時は、太陽の方に背いたりするので、太陽の光りを受ける位置と時間に多少が出来るからである。今、この理を最も平易に説明するには、太陽が動いて、地球を中心にして、その周囲を運行するものと假定した方が便利であるから、この方法によつて説明しよう。

自轉の時

今、かりに、太陽が赤道の處をめぐるとすれば、二十三時五十八分四十六秒ばかりで、一周するのであるから、一秒時間には、一千四百八十五尺ばかりを行くことになり、約一時間には、經度を十五度進み、一度を進むには四分時間を要することになる。そこで、十五度隔たつた處では、全く一時間の差が出来ることになる。これから、太陽が北の方のある緯度の上をめぐると、南の方のある緯度の上をめぐると、この割合は同じであるが、たゞ、一度の長さだけは、緯

正午

度の上つたり、下つたりするによつて違ふ。即ち時間と經度との割合だけが同じで、里數は位置によつて差があるのである。

世界の標準時

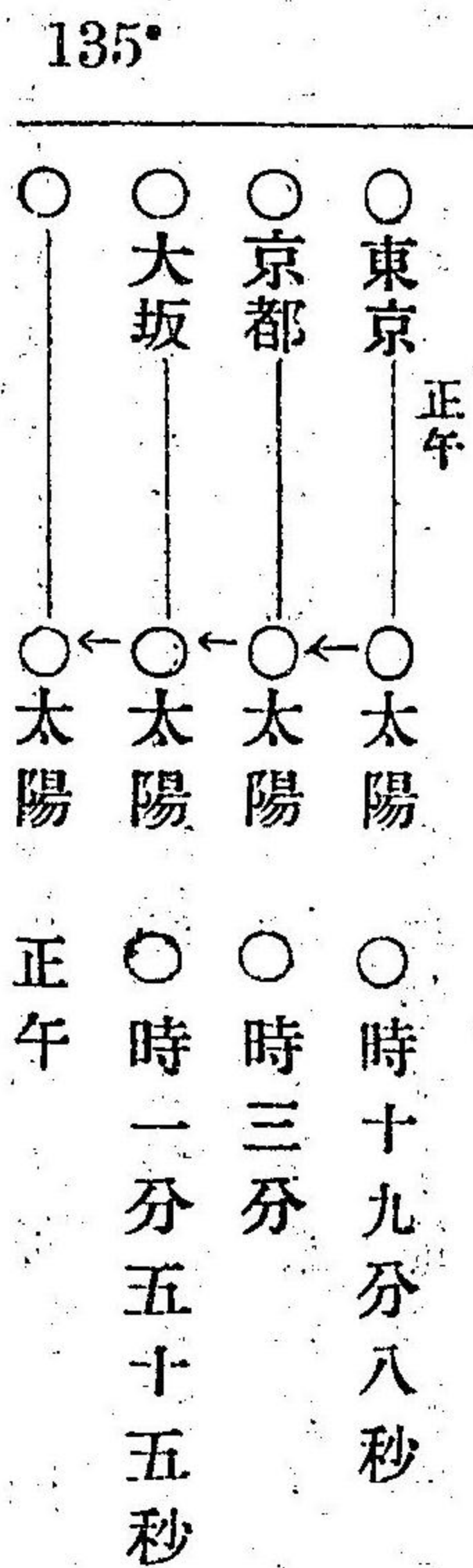
太陽がある土地を通過して居る子午線の眞上を照らす時刻が、その地の正午である。そこで、正午は、土地の經度が異なれば、それに應じて異なる筈である。今日では、世界萬國に通じての正午時刻

日本の標準時

は、イギリスのグリニッチ天文臺を通過する子午線の眞上に、太陽が来た時と定めてあるが、それでは、土地が、そこから距るに従つて眞の正午時と、大層違つて實際に不便であるために、國々に、皆標準時といふものを定めてある。我日本では明治二十一年一月以後は、東經百三十五度の子午線の上に、眞直に太陽が来て居る時を、正午の時と定めることになつて居る。この子午線に當る地方は、丹波福知山の近傍、攝津兵庫、紀伊の和歌山の西の方である。この

中央標準時
西部標準時

正午の時を中央標準時と名づける。臺灣が我版圖になつてから後は、別に西部標準時といふものを定めて、東經百二十度のところの子午線上を、太陽が直射する時を正午とし、臺灣や琉球などでは、これを用ひることになつて居る。この子午線は、琉球の先島群島のあたりを通過して居る。この西部標準時と、中央標準時とは、全く一時間違つて、吾等が午食をすまして、談話、休憩して居る間に、やがて、臺灣邊の住民は、午食をすることであらう。



各地の正午を知る方法

日時計

その地方地方での正午時を知るには、水平に、板を置いて、それに東西南北に正しく直線を引き、磁石で、方位と、その板の面の線とを合はせて、その交叉した點に、針のやうな小さい直いものを立て、その日晷が、南北の線の上に重なつた時を正午とするが、最も便利である。もしその板の面に、二十四時間を割りつけると、それで時間が知られる。

日時計は、この理によつて作つたもので、圓い盤の周圍を二十四時に分ち(三十分を知るには四十八に分ち)中央に、眞直なる針様のものを立て、東西南北に正しく交叉した線を引き、磁石で、南北の方位を正しく合せるやうにしてある。その南北の線の上に

曆の基礎

日晷が来た時が正午で、それから午後になると次第に北から東の間に移り、午前には西から北の方に進んでゆくので、時間が知れるのである。こゝでちよつと附けて説明して置きたいのは、太陽が地球を一周する時間即ち一日は、二十三時五十六分ばかりであるといつたが、實際、太陽がある子午線から出發して再びこの子午線上にかへり来る時間は、毎日同一でない。之を太陽日と名づける。その毎日同一でないのは、地球の運行する速力が、時によつて異なるがためであつて、太陽日の最大の時で、二十四時三十秒、最小の時で二十三時五十九分三十九秒ばかりである。之を平均したもののが平均太陽日といつて、曆に用ひて居るものである。

晝夜の長

これから晝夜の長短を説明しよう。赤道のところでは、晝と夜と

太陽日

平均太陽日

晝の最短時

晝の最長時

晝夜等分

は、毎時^{イッモ}も同じであるが、その他の處では、時によつて差異がある。十二月二十一日頃は、太陽が南の方の、赤道から二十三度半ばかりの南回歸線の直上を直射する時で、赤道から北の方は、一年中最も晝の時間が短い時である。それから、段々太陽が赤道の方に近づいて、三月二十一日頃には、太陽が赤道の直上に来るやうになる。この時は、晝と夜との長さは同じである。それから、更に北に進んで、六月二十一日頃には、赤道より北二十三度半ばかりの處に來ると、今度は、晝が最も長くて、夜が短い時である。是より太陽は、更に南に回り、赤道の直上に來ると、また晝夜は同じ長さになる。この時は、九月の二十三日前後である。更に赤道より南二十三度半の處に回ると、また晝が最も短くて、夜が長くなる。即ち前の十二月二十一日頃である。

曆の基礎

日の長短は、大體、右の如くであるが、赤道より北に進むに従ひ、即ち

緯度が異なるに従つて、差異がある。例へ

ば六月二十一日頃に

なると赤道では、常に

晝夜等分であるが、そ

れから、次第に北極に

近づくに従つて、晝の

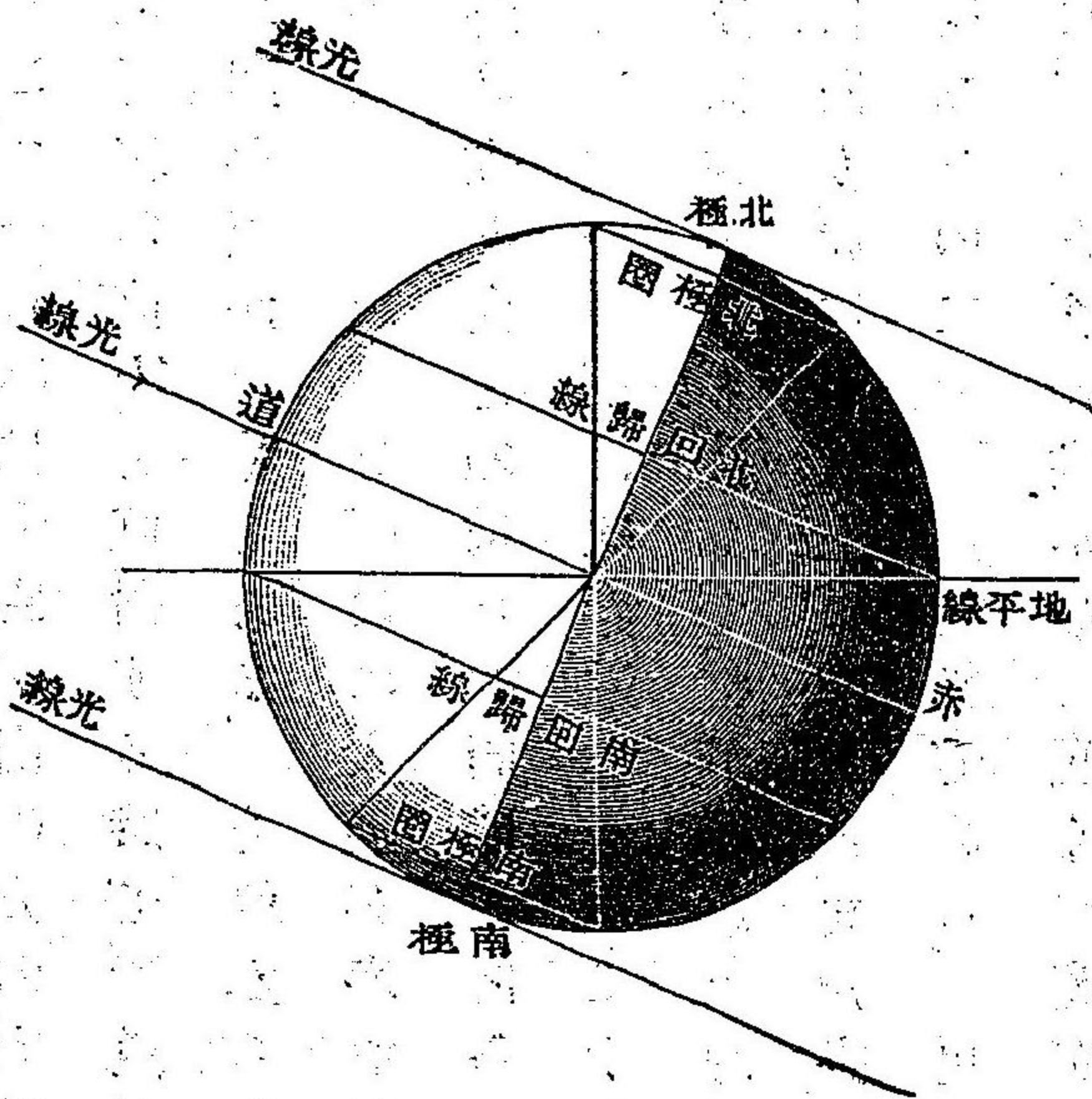
長さを増し、いよいよ

北極圏に入ると、晝ば

かりになるのである。

今次に緯度と晝夜の最長最短時間との關係を示さう。

第三圖



春分秋分の晝夜の關係

緯度と晝夜の時間

緯度

晝の最長時間

晝の最短時間

一〇度

一二時 三五

一一時 三五

二〇度

一三時 一三

一〇時 四七

三〇度

一三時 五六

一〇時 〇四

四〇度

一四時 五一

九時 〇五

五〇度

一六時 〇九

七時 五一

六〇度

一八時 三〇

五時 三〇

六七・三三〇

一月 六九・五〇

二月 七三・四〇

三月

七八・一一〇

四月 八四・五〇

五月 九〇・〇〇

六月

東京の晝夜の時間

東京の中央天文臺は、北緯三十五度四十一分の所にあつて、晝の最長時間十四時三十五分、夜の最短時間が九時二十五分である。尙實際は、これよりも晝が長いのである。その理は、この計算は太陽

各地の緯度を知る方法

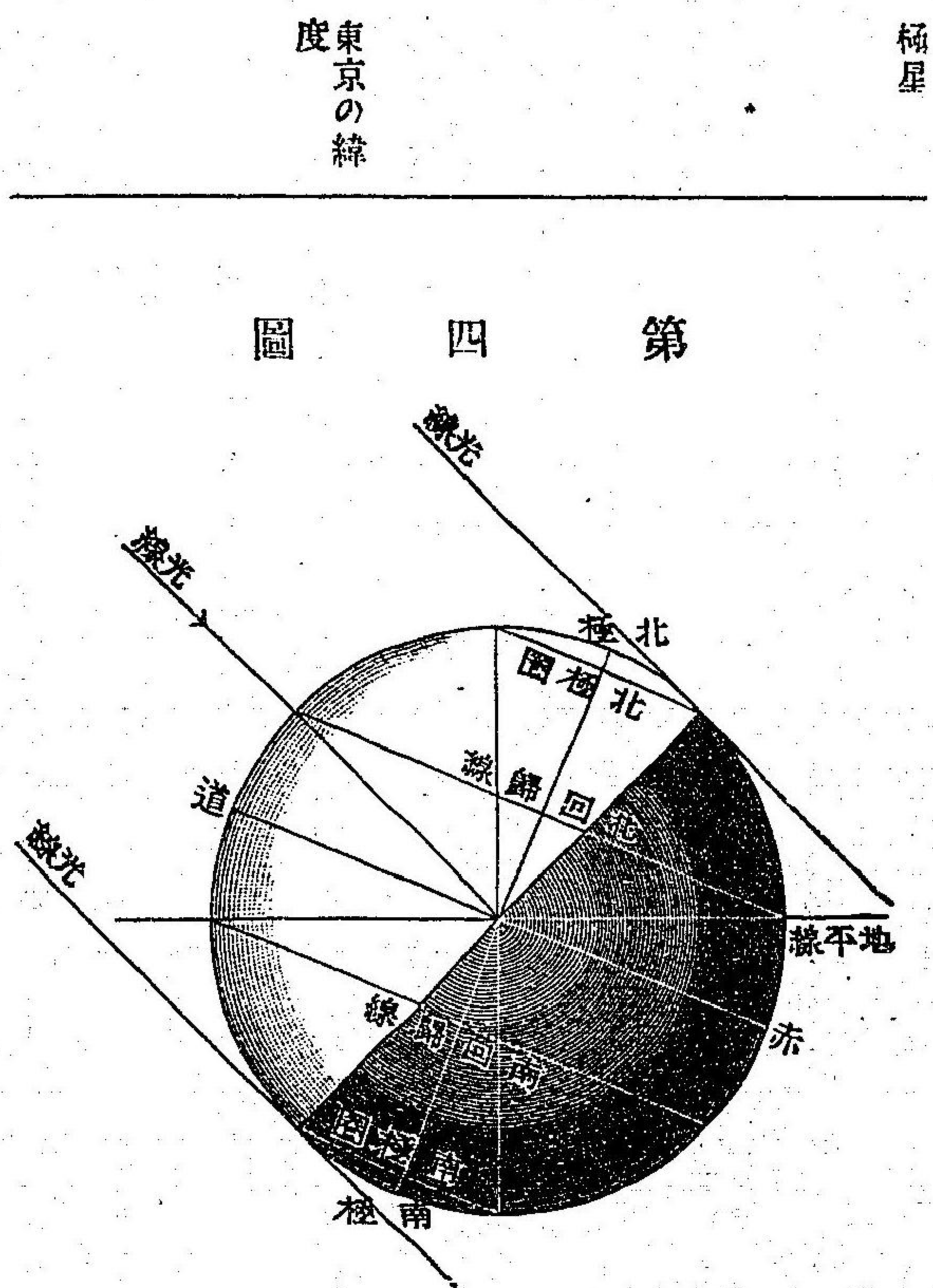
の中心からの計算であるが、實際は、太陽の周圍までは距離があるので、太陽の中心が、地平線といつて、吾等の眼に平らかに地上に線を引いた如く視ゆる下にかくれても、まだ、半径は視えるのと、一つは、光線が空氣の中を通つて眼に入るまでに屈曲して、太陽の全體が實際地平線の下にかくれても、吾等の眼には、光線が入つて來ると、今一つは、夜の曉方に、これと同じ理で、まだ太陽が地平線に上らない時から、薄明るくなつて視えるからである。

以上で、晝夜の長短の理を説明したが、さて、その各地の緯度の高さを知るには、如何すればよいかといふ事を、序てに説明しよう。

ある場所の緯度をはかるには、極星といつて、地球の地軸を眞直に延ばした位置にある星の高さをはかるのが便利である。この星は、常に同じ處に在るから、かりに赤道の直下で、この星を望むと、北

方にも南方にも水平面に現える。こゝから一度北に進むと、北極星が水平線上に一度

上り、南極星は一度下る。故に角度計で、これを望むと、その地の緯度が知れる。東京では、はかると、北極星が、三十五度四十一分の處に當るから、即ち緯度が三十五度四十一分である。



第四圖

東京の緯度

極星

まだ説明を要することがあるが、それは、後に譲つて、次には、四季の

地球の公轉

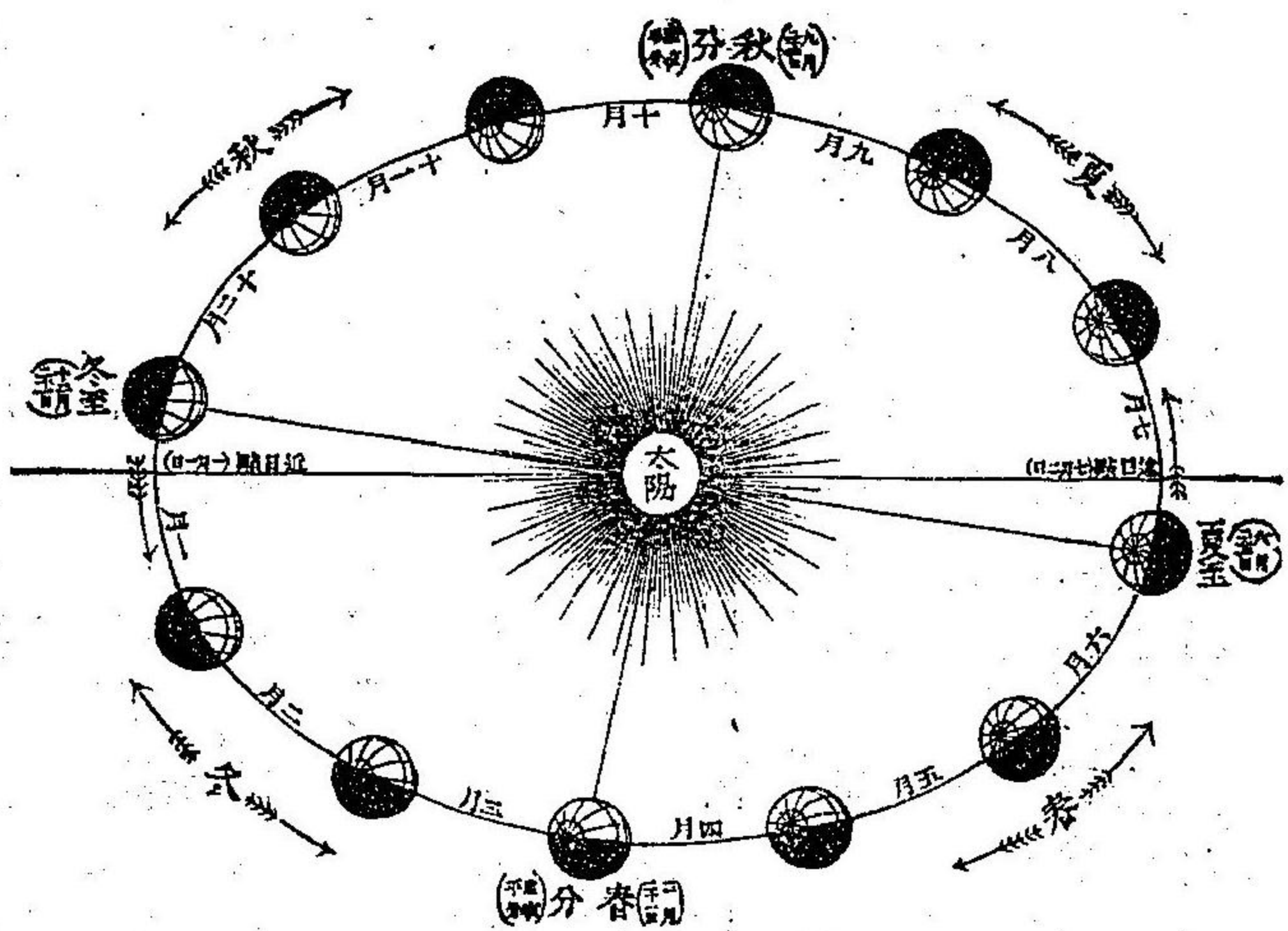
地球の傾斜の有様

氣節の生ずる理を説明しよう。
 地球には、自轉の外に、公轉といつて、二十三時五十六分ばかりで一廻轉しながら、更に三百六十五日二分四厘二二一の時間で、太陽の周圍(凡そ二億三千八百七萬五千里)を一周するのである。この公轉によつて四季の區別は生ずるのである。
 地球の南北の軸が、少しも傾かないで、軌道の面と直角になつて居るものとすれば、いつも同じ氣候である筈であるが、前にも述べたやうに、地球は、軌道面の鉛直線とは二十三度半の傾きをなして、運行するによつて、ある時は、地軸が太陽の方へ向いて居る時があり、ある時は、太陽の方へは背いて軌道の外側に向いて居る時もある。又ある時は、太陽の方に向きもせず、背きもせず、平行した如き有様の時もある。

四季の別

曆の基礎

第五圖



四季の別

ところで地球表面の熱といふものは、太陽に照らさるゝによつて生ずるものであるに、太陽の光りが、真直に射ると斜めにあたるとによつて、その熱度に相違がある。そこで、既に説明した如く、太陽が北回歸線の邊を直射する時は、非常に熱い時で、これは、地軸が太陽に向つて居る時で六月二十一日頃である。

夏至

冬至

この時を夏至と名づける、之に反して、太陽が南回歸線の眞上に直射する時は、地軸の北は、太陽に背いて居る時で、北半球の回歸線のあたりは、斜めに光りを受けるから寒い。この時がいよいよ冬至で、十二月二十一日頃である。又、太陽が赤道の眞上を直射する時は、地軸が、太陽に向きもせず背きもせず、寒熱中和の時で、これが三月二十一日(春分)九月二十三日(秋分)頃である。

回歸線

附記

回歸線とは、太陽が、南と北とに來た時に、この眞上より北にも南にも、最早進まないで、再び赤道の方に回り歸る境界線の意味である。

兩回歸線上の外は、何れの緯度の上でも、太陽が、一年の中に二度は來るのである。其緯度と月日を示せば、次のやうである。

赤道

九月二十三日

三月二十一日

北緯五度

四月三日

九月十一日

十度

四月十六日

八月二十八日

十五度

五月二日

八月十三日

二十度

五月二十一日

七月二十四日

二十二度半

六月二十二日(一回)

近日點

地球が太陽に最も近くなる時を近日點と名づけて、今の太陽曆の一月一日は、略此時と一致して居る。この時は、地球の軸の北は、太陽に背いて、軌道の外部の方に地軸の北の方が向いて居るので、氣候は寒く、晝が短かい。それから段々運行して三月二十一日頃に至ると、地軸は太陽と平行して、軌道面の内にも外にも傾かないから、太陽は、地球の赤道を眞直に照らすので、晝夜が等分になる、この時を、春分といふのである。それより次第に運行して、六月二十一

春分

遠日點

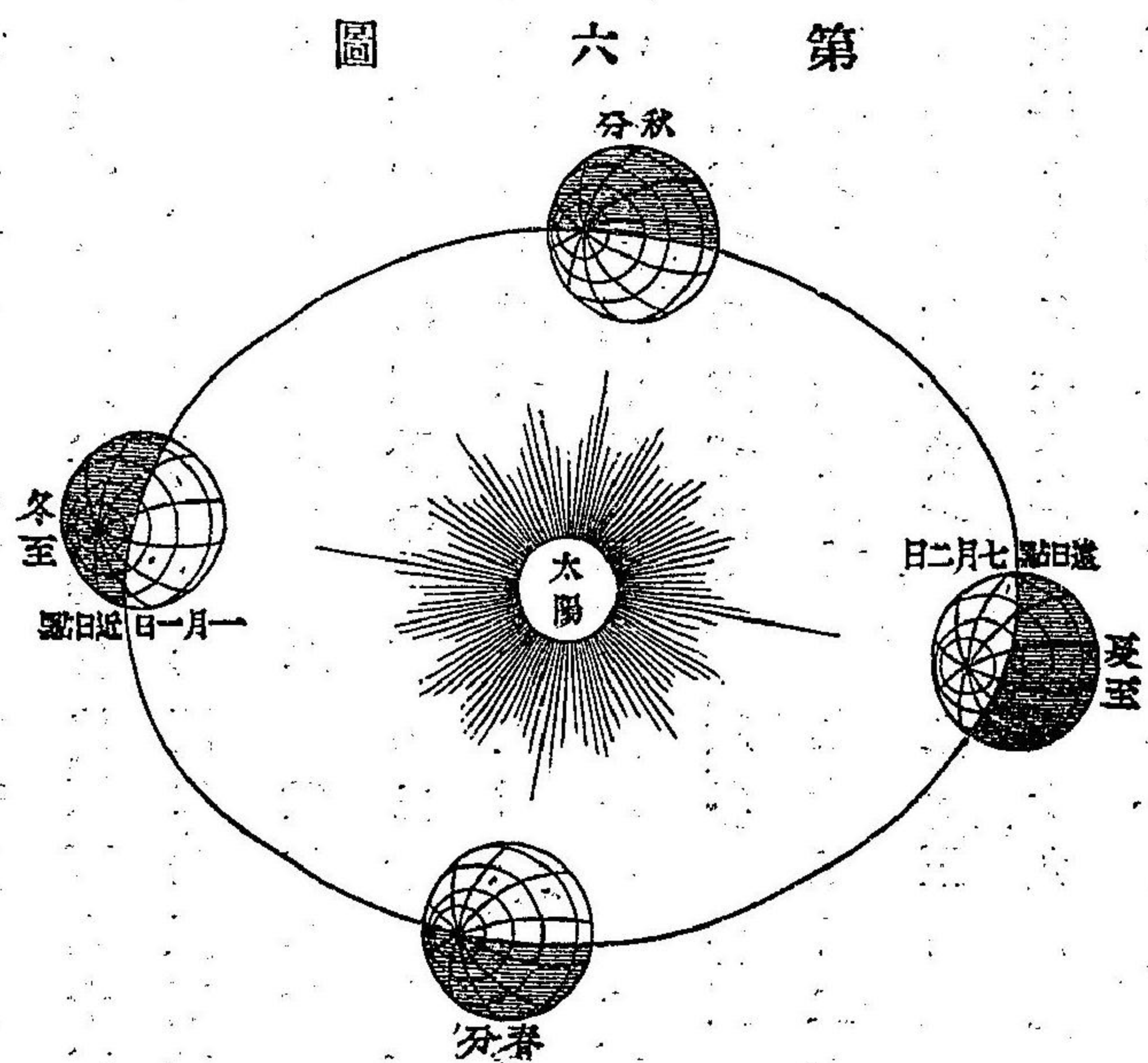
秋分

一年の日
數

日になると、前の冬至の時とは全く反對に、地軸の北が、太陽の方に傾いて居るので、氣候は熱くて、晝が長い。この夏至から少し運行して、七月二日になると、太陽と地球との距離が最も遠くなる。この時を遠日點と名づける。更に進んで、九月二十三日頃になると、前の春分と同じやうな工合になる、この時が秋分で晝夜等分の時である。それから次第に運行して、またもとの處にかへる。その間の日數が、三百六十五日二四二二一かゝるので、これを一年とするのである。

地球の軸の傾斜の度が年々少しづつ、變はることは、前に説明したが、その外に、今一つ、地軸は位置を變へて、凡そ二萬五千八百年ばかりで、圓い輪をゑがいたやうに、その傾斜の度を變化することである。そこで、恰も圖に示すやうに、全く地軸の向く方向が變はることになる。

春秋分點
の變動



四季の別

とになる。その結果として、地球が太陽面に對する位置即ち赤道と、赤道との交叉した春分點、秋分點が變はつて來ることになる。現に、一個年に、平均度でいへば、五十秒四分の一づつ、左の方へ動いてゆきつゝある。かやうに、春分點、秋分點が動くにつれ

回歸年

て、太陽が、春分點を出て、再び春分點に歸る時日(回歸年といふ)に變化が生ずる。回歸年の時日は、三百六十五日、五時四十八分四十五秒であるが、現在では、百年の間に〇五四秒宛、減じてゆきつゝある。一年を四季に分けると、各の季節の初日には、地球の位置は、軌道の三百六十度の四分の一即ち九十度宛距てた處に在る筈であるが、併し、前にも述べた通りに、地球の速力は、近日點の處では速く、遠日點の處では遅い爲に、各季節の日數は、同じでは無い、其結果として、現在、北半球の方では、春、夏、秋、冬の各季節の長さは次の如くである。

各季節の長さ

春分より夏至まで	九十二日二十二時
夏至より秋分まで	九十三日十四時
秋分より冬至まで	八十九日十七時
冬至より春分まで	八十九日一時

近日點の移動

處が、近日點(現在は春分點を零度として、百度三分の一の處にある)は、年を度ていへば十一秒四十六づゝ右の方へ動いて居る、即ち春分點は五十秒四分の一づゝ左へ動いて居るので、都合六十一秒ばかり距たりつゝあるのである。その結果として、四季の長さに變化が生じて來る筈である。

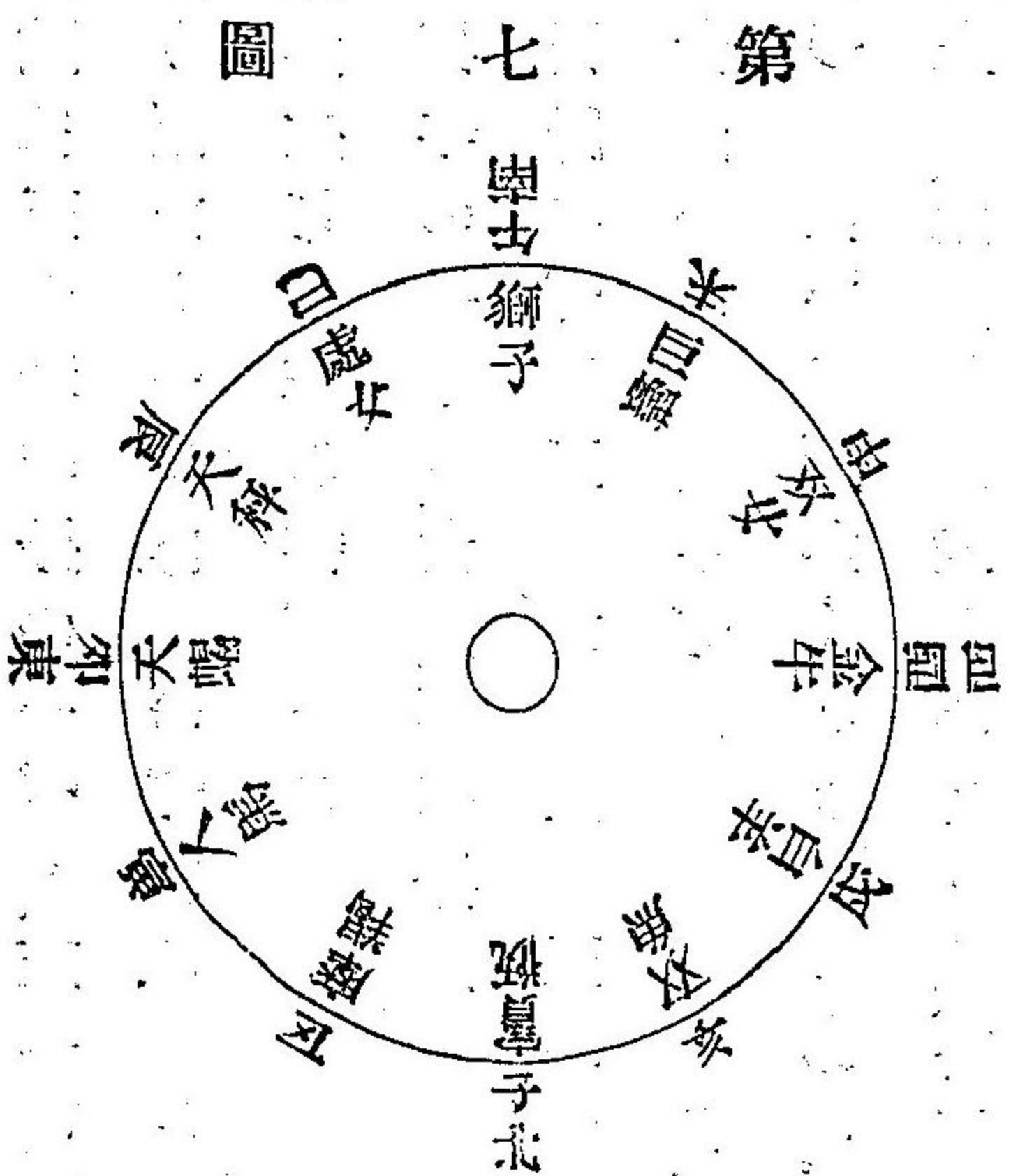
回歸年の變動

一個年の長さは、太陽が春分點から出て、再び春分點にかへる間即ち回歸年では、三百六十五日五時四十八分四十五秒四で、これが今の太陽曆の一個年である。然るに、この春分點は、百年間に〇五四秒づゝ動いて短かくなりつゝある。以上で、太陽と地球とのことは、略了解が出来たであらふ。これから月のことを説明せねばならぬ。

附記 此で、説明して置く必要のあるものは、黄道の周圍を十二の

十二宮 宮に分けることである。之は、軌道三百六十度を十二に分けて、一宮を三十度づゝにしたもので、一の符合に過ぎぬものである。之

十二星座



黃道周圍の十二宮

一年三分の二で一度づゝ動いて居るために、今では宮と星座との間は差が生じて來て居る。

二月と地球

太陰曆は、もと月の日々に形を變化してゆく有様から、月の運行を計つて、之を基にして、組み立てたものである。ところが、月は元來氣節とは餘り關係のないものであるから、後には太陽の運行や、地球と太陽の關係を調べて、氣節といふものを正確にするやうになつたのである。そこで、太陰曆の組み立てを知らうと思へば、必ず月の運行や、地球と月との關係を調べねばならぬ。

月は、地球と同じく、自轉をすると共に、また地球の周圍をめぐるところの公轉をする。しかし、月は直接に、太陽に屬したものでなく、地球について居て、地球の周圍をめぐるつゝ、地球につれられて、太陽の周圍をめぐるものであるから、陪臣見たやうなものである。ところが、月は日々に盈ちたり虧けたりして、その形を變化するの

地球と月との關係

月は地球の陪臣

て昔から人の目に早くついて、曆とは非常に親密の關係を有つて居るやうになつたのである。

月の大きさは地球の四分の一ばかりで、直徑が八百八十六里ばかりある。地球との距離は、時によつて多少違つて居て、最も地球と接した時で、九萬二千五百里、最も遠い時で十萬三千六十里ある。これを平均すると、九萬七千八百五十里ばかりになる。而して、その軌道は、地球の太陽をめぐる軌道の周圍に波紋狀になつて居て、これをひき延ばすと、六十一萬三千九百里ばかりになる。

そこで、月がその軌道をめぐるには、如何なる有様で、又地球に對して如何なる關係をもつて運行するかといへば、月も、矢張、地球の地軸が、二十三度半ばかり傾いて運行して居ると同じやうに、地球の黄道に對して、月の赤道(月の南北の極から垂直線をひいて、之と中

月の大き

月の距離

月の軌道

月の赤道と黄道との傾き

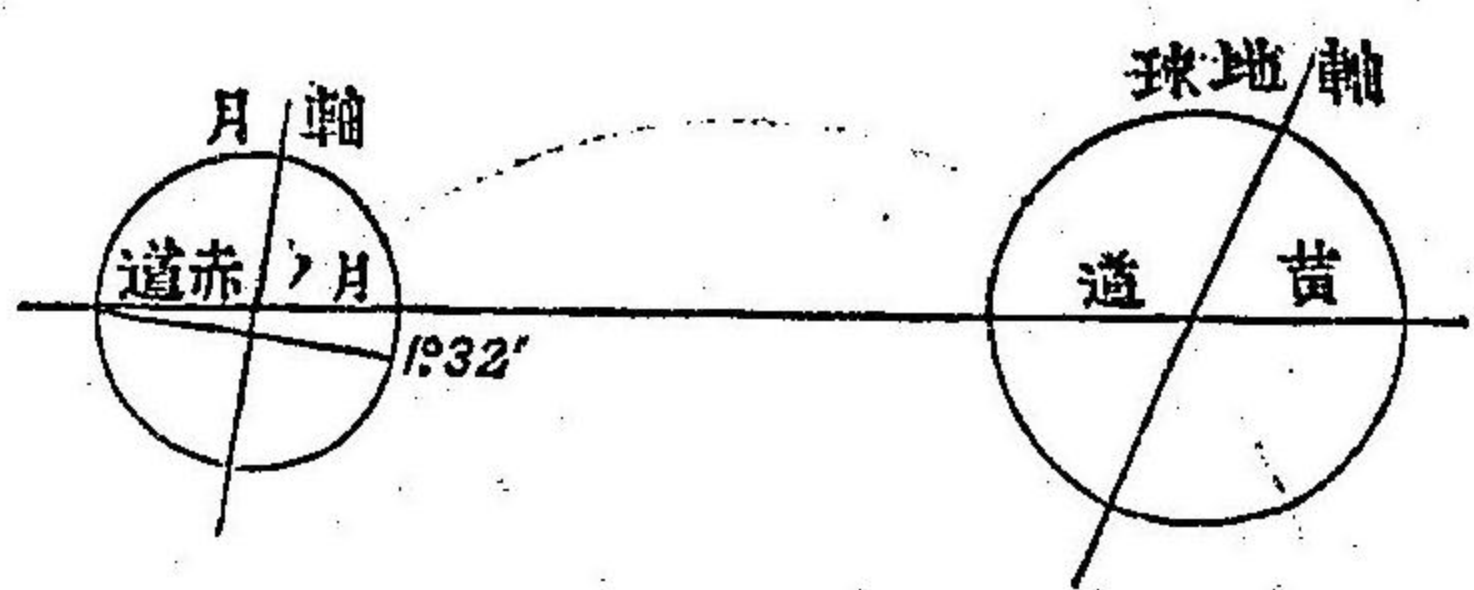
月の軌道と黄道面の傾き

白道

交點

央の處で横に直角になつた線をいふので、地球の赤道と同じ意味である)は、一度三十二分ばかりの角度をなすほど傾いて運行して居るのである。

第八圖



月の赤道の傾斜

それから、月の運行する軌道面は、地球の黄道面と、五度九分ばかりの角度をなして居て、或る時は、黄道の北に、或る時は、黄道の直上に、又或時は黄道の南に上下する有様は、丁度、太陽が地球の表面を赤道より南北に往來するのと同じ有様である。

月の軌道を白道と名づけ、黄道と交叉する點を正交とも中交とも節とも名づける。黄道より北に出る時を昇交、南に出る時を降交と名づける。

月の半面のみを地球に示す

曆の基礎

尙月は常に、其半面のみを、地球に示して居る。併し月が、全然其半

を示さないかといふに、長い間には、上の方が一部分見えたり、横が

見えたりするので、其表面

の百分の五十九丈を見る

ことが出来、四十一丈を見

得ない、見らるゝ部分の、四

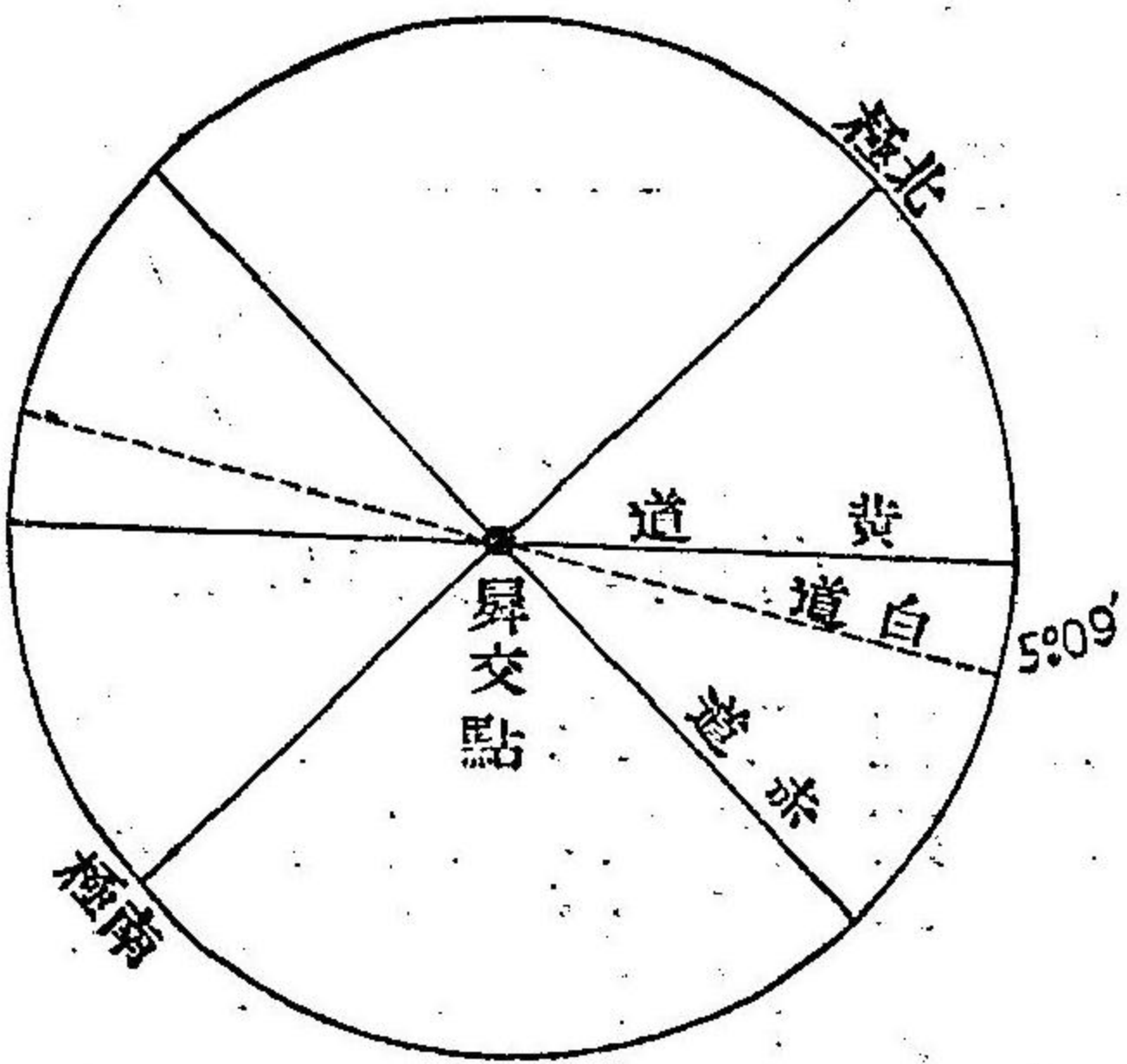
十一丈が、何時でも見られ

る所て、残部の十八が交る

交る見えたり、見えなくな

つたりする、部分である。

第九圖



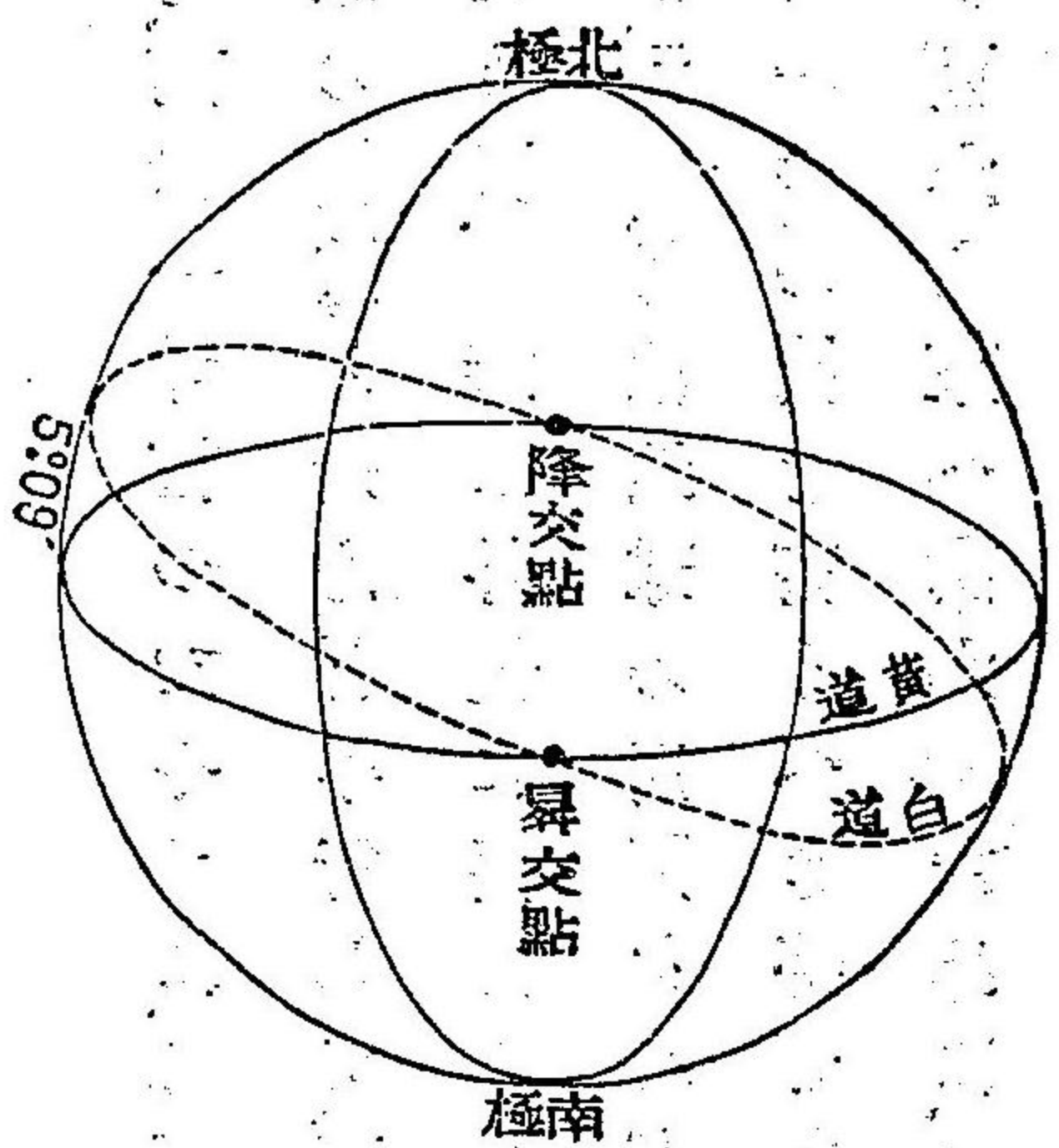
昇交點

地球では、太陽が赤道より南の方から、北の方に移る時に、黄道と赤道との交叉する點を通過する、その交叉點に來た時を春分點と名

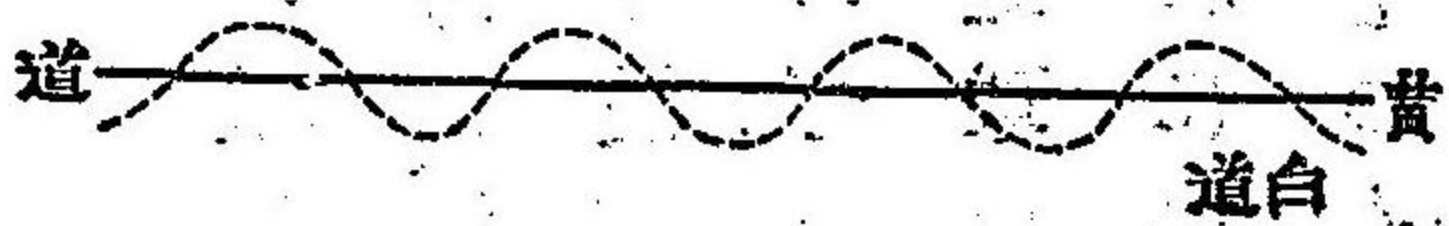
昇交點

づけたが、月が、地球の黄道より南の方から北の方に移りゆく時に、地球の黄道と交叉する點を昇交點と名づける。これは、地球の南

第十圖



月の軌道と黄道との交叉



月の軌道を水平に見たる圖

を下とすれば、北は上になつて、下から上方に昇つてゆく時に、月の軌道(白道といふ)と地球の軌道とが交叉する

點といふ意味である。それから、月が北方の最高點まで來て、次第に南方に向つて、移る時に再び、黄道と交叉する點を通過する、この

曆の基礎

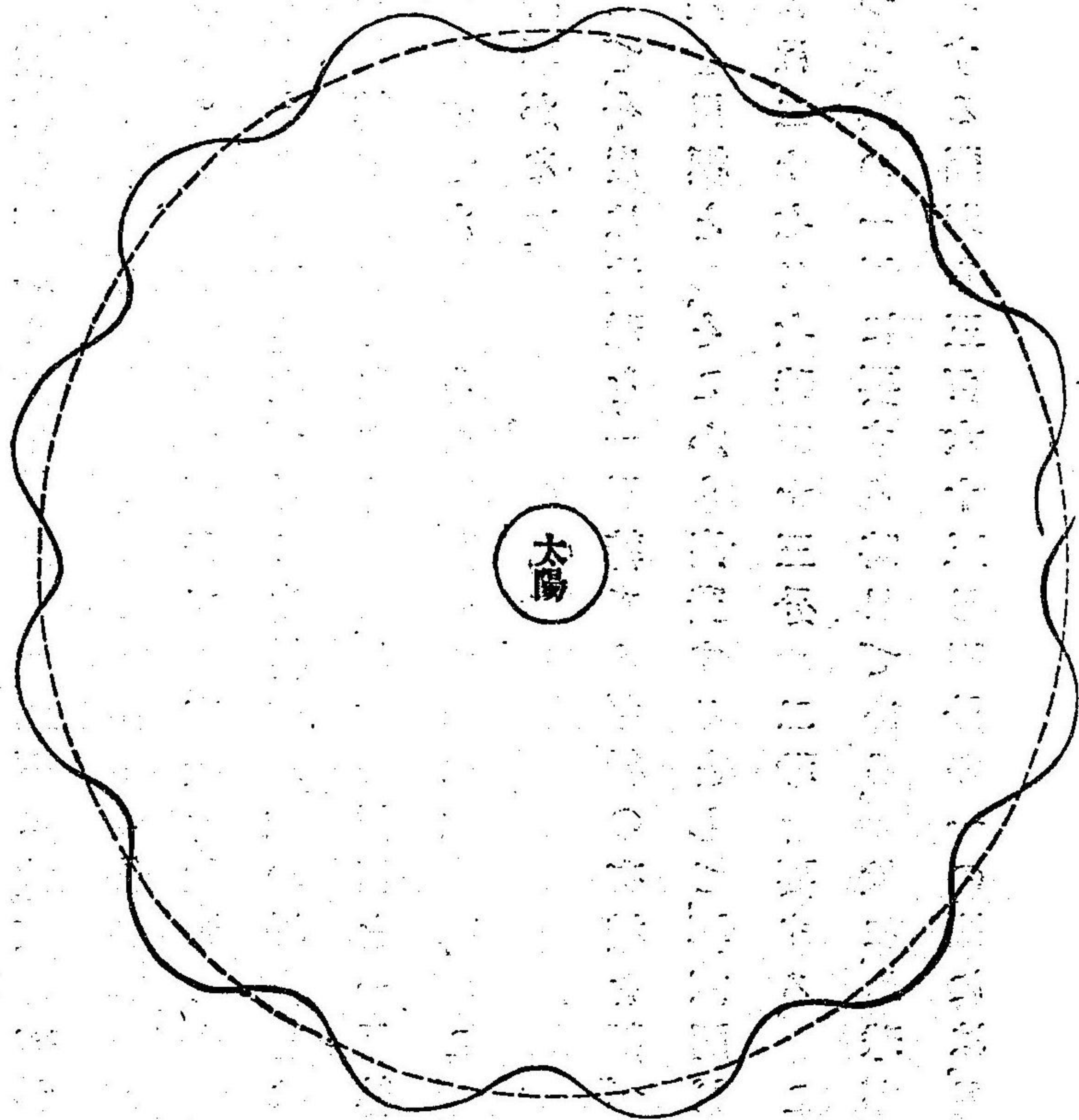
降交點

點を降交點と名づける。これは、前の反對に、月が上から下に降つてゆく時に交叉するといふ意味で、太陽の場合の秋分點と同じである。

月の軌道の有様

そこで、前に一寸言つたやうに、月がめぐる軌道を、上方から見下すと、地球の軌道と殆んど平行して、而も、或時は、地球軌道の内側に這入つたり、又、或時は、外側に出たりして、恰も波紋状になつて居る。これは、元來、月は地球の周圍をめぐるのであるから、地球を中心にして一つの圓を書くべき筈であるが、地球が常に運行して、その位置を西から東へ動かすために、月もそれにつれられて、環を書がくことが出来ないで、遂に波紋状の軌道をつくるのである。故に、若し、地球が一と所に定住して動かない時は、完全な圓を書がいた軌道をつくる筈である。そこで、月の軌道を、縦から見ると、水平面

第十圖



月の軌道を縦に見るた

月の軌道を横に見るた

(月の軌道は線波、地球の軌道は線點)

月の運行

上に、波紋を畫がき、横から見ると、下に波紋を畫がいて居ることになる。

これから、いよいよ月が運行する有様を説明しよう。先づ、月には自轉があるといつたが、月の自轉は、地球の場合とは違つて、一晝夜に一廻轉するのではなくして、地球の周圍を一周轉する間に、一回轉するのである。そこで、月の場合には、自轉のことは、餘り説明する必要がない。

恒星月

そこで、今度は、地球を一周轉する運行の有様を調べて見ると、ある恒星を目標とし、そこから出發するとして、再び同じ位置に歸るまでには、二十七日七時四十三分十二秒を要する。これを恒星月といつて、眞の一周に要する時日である。故に、地球が、太陽の周圍を一周する間即ち三百六十五日四分の一の間には、月は十三回半ば

太陰月の時間

かり周轉することになる。そうすると、曆の一ヶ月とは、合はないが、これは、外てはない。月が光りを地球に見する形の變化の、新月から、新月までの間の時間が、二十九日十二時四十四分三秒ばかりになるので、曆には、この太陰月といふものを基礎にして居るからである。

月の光

然らば、何故に、月の形の變化の一周する日時と、實際に地球の周圍を一周轉する時間とが相違するかといふ疑問が起るであらふ。いふまでもなく、月は、元來、自身に光りがあるのではなくして、太陽の光りを受けて、それを地球の方に反射するので、吾等の眼には、月が輝いて居るやうに見えるのである。そこで、今太陽と、月と地球とが會合して、一直線の上か、又は、それに近い處に重なつて居る時がある。その時は、太陽と地球との間に、月が狭まつて居て、月の太

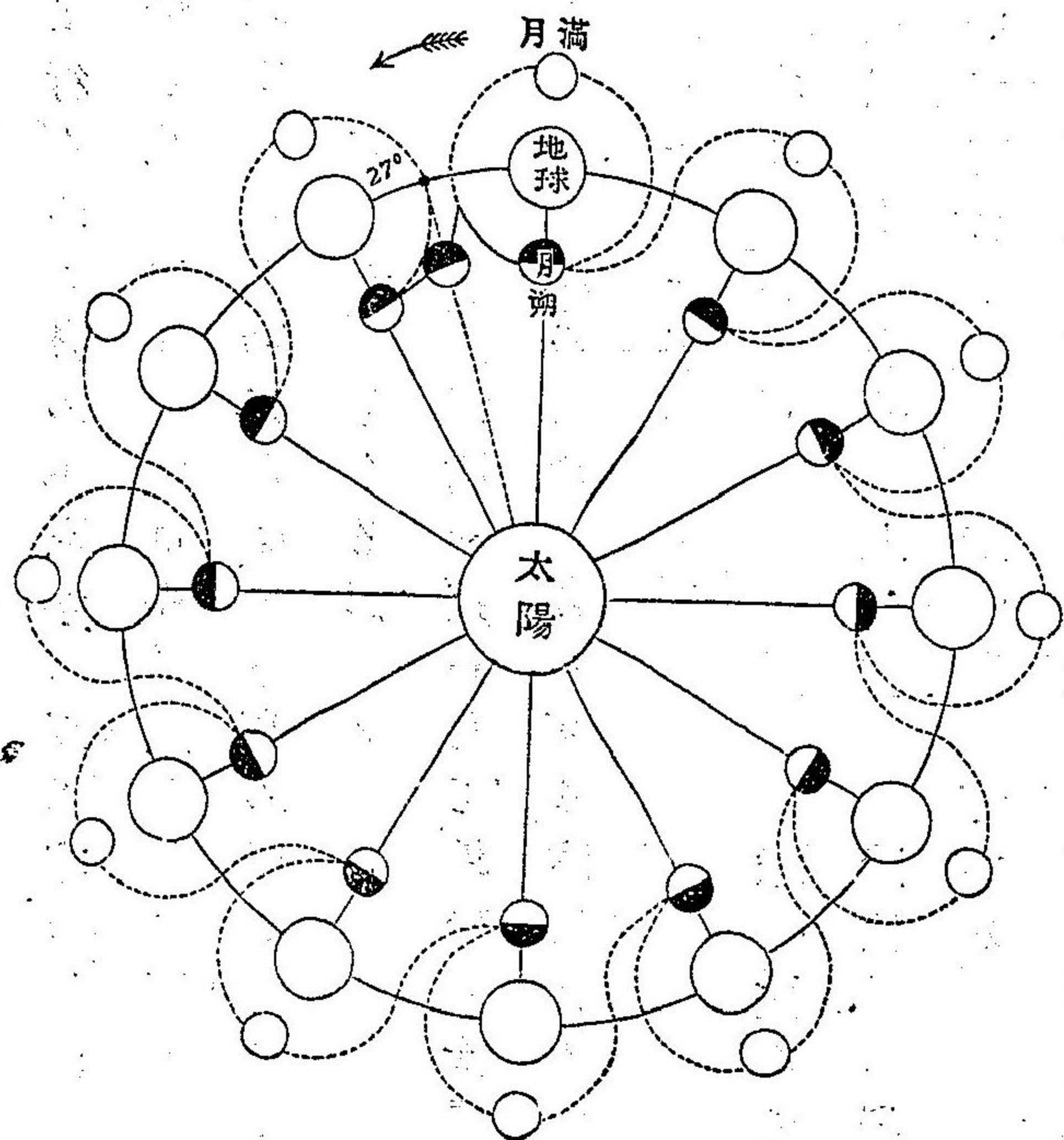
朔

恒星月と太陰月との異なる理由

陽に面した方は、満月であるが、地球に面した方からは、少しも月の光りを見る事が出来ないから、この時を朔といひ、今の曆では、新月としてある。それから地球も運行する。月も次第に太陽と離れて、今度は、太陽の光りを、少し側面に受ける位置になると、地球からも、月の光りが見える位置になる。この時が三日月といふ頃である。かやうにして、月が地球を一周する間實は太陽恒星を目標にして、もと出發した時の位置に歸つて来る間即ち二十七日七時四十四分十二秒であるに、地球は、もとの所より更に、自分の軌道を二十七度内外、前の方に進んで居るが爲めに、もと三つが重なつた時の位置になるには、即ち朔月は更に二十七度内外だけ、地球に追いつかねばならぬことになる。その時間が二日五時ばかりを要するので、二十九日十二時四十四分三秒で、新月から次の新月にかへ

月の形の變化

第二十圖



地球を動かして月の運行を示す

ることになるのである。こゝで序でに、月の形が變化するありさまを説明して置かう。朔前に説明したから、こゝには省く。

新月

新月 更に月が太陽と地球との間から離れかけ、地球も、次第に運
行して行くので、月の地球から視て右の側面に、始めて鎌のやうな
光る所が見え出す。いはゆる三日月の頃である。この新月とい
ふ名稱は、今の太陽曆には、一日(朔)の所にあてゝあるから、曆を見る
時には、其積りて、日をくるがよい。

上弦

上弦 それから、月が段々運行して、地球と太陽とに直線をひくと、
凡そ直角(九十度)の位置に月が来る時は、月の半分(右方)だけ光る。
この時を上弦と名づける。

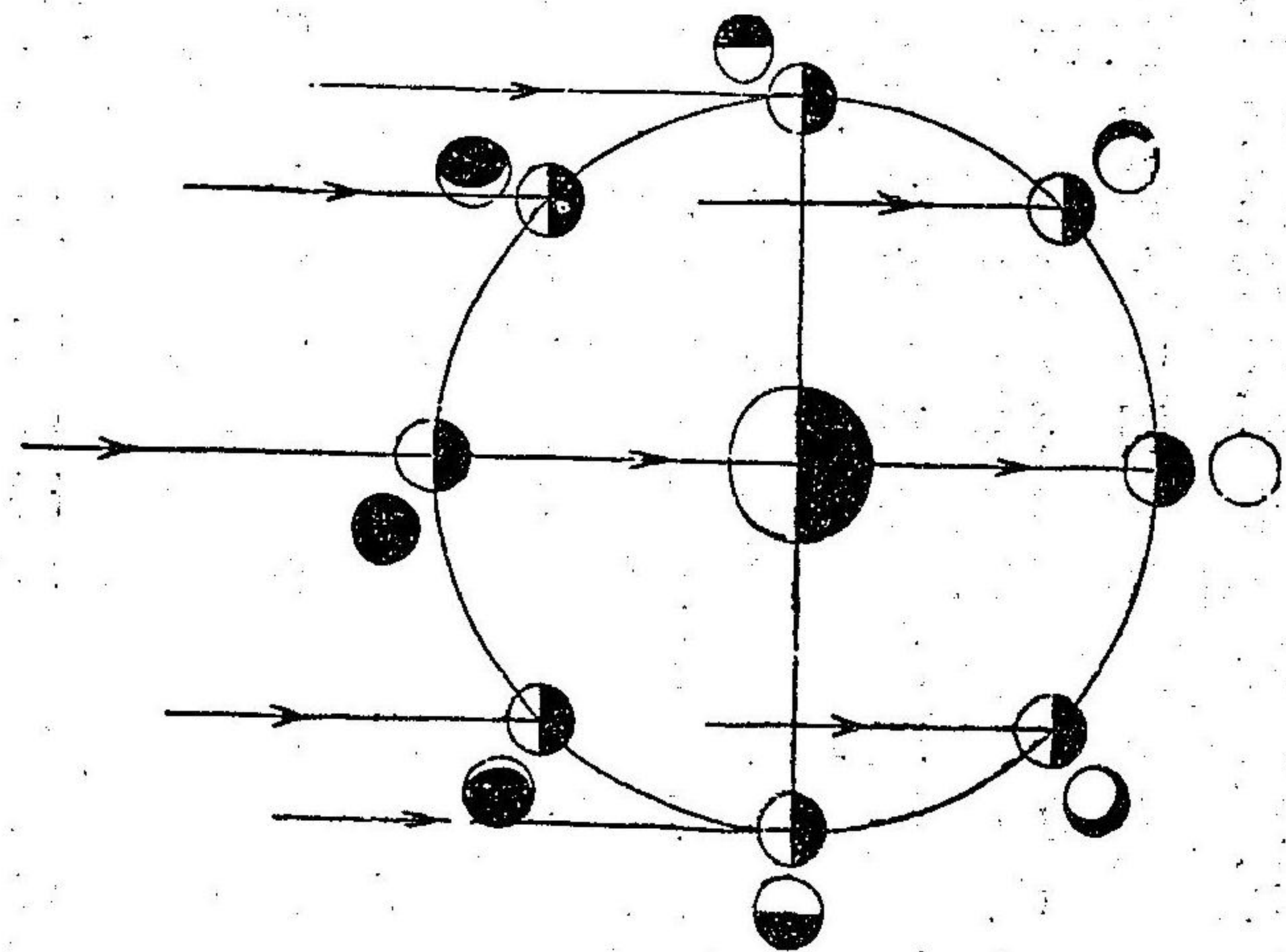
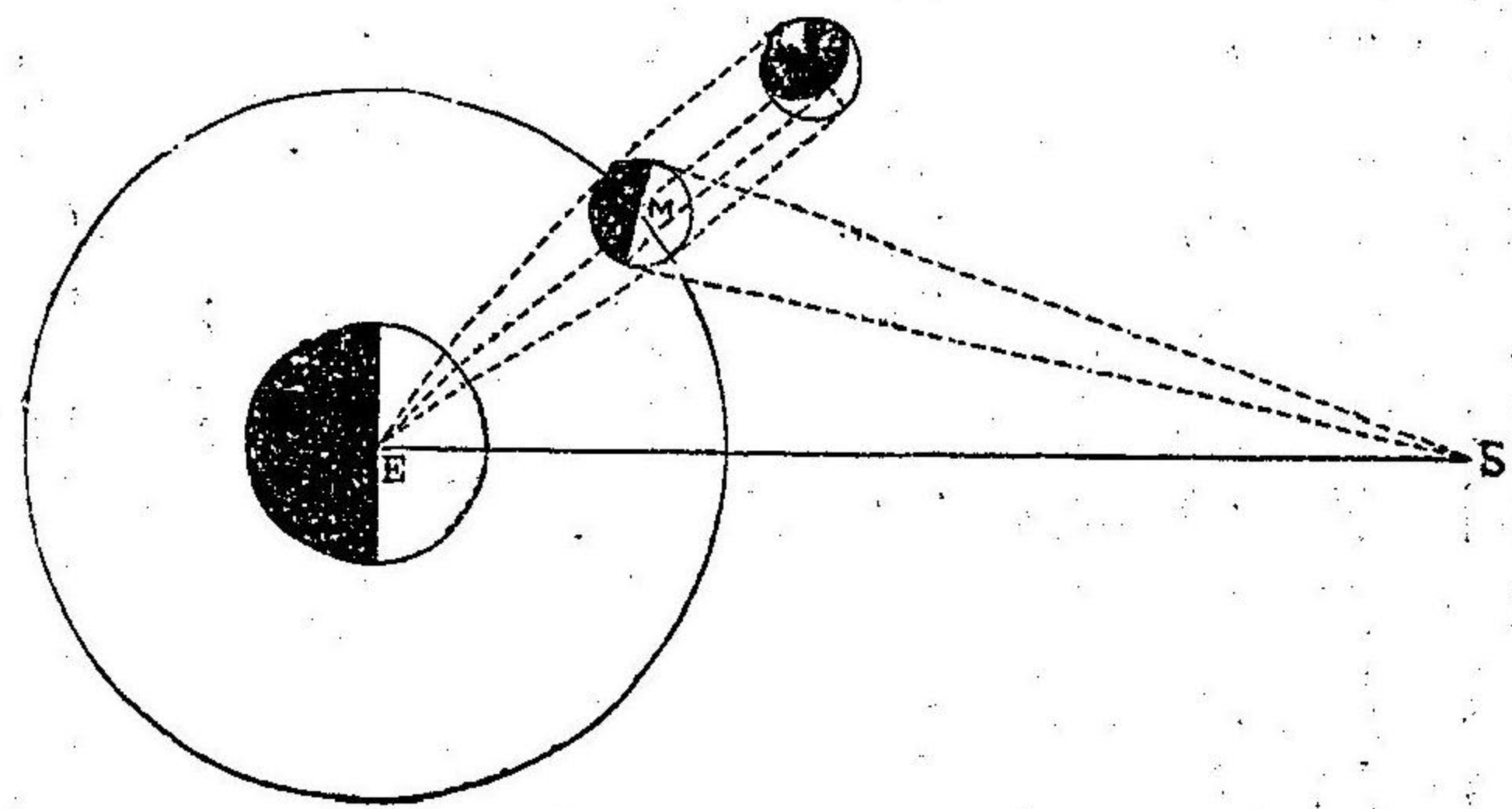
満月

満月 更に月が運行して、太陽と地球を挟んで、殆んど一直線の上
か、又は正しく一直線の上に重なる時は、前の朔の反對に、月の全面
が輝いて視える。この時が満月である。

下弦

下弦 月が、東に運行して、地球と太陽と月とが、直角になつた時は、

第三十圖



月の盈虚

(心中の月はM心中の太陽はS心中の地球はE)

前の上弦の時のやうに、月の半分が輝いて見える。しかし、この時

弓張月

は、月の左の方が輝くのであるから、之を下弦と名づけるのである。俗に上弦の時の月を、弓張月といひ、下弦の時の月を後の弓張月といふことがある。

日月の蝕

こゝて更に説明を要するものは、日蝕や月蝕のことである。月の軌道と地球の軌道とが同一平面上にあつて、月の運行することが、平板の上に丸がころがるやうなものであるならば、一ヶ月に一回は必ず日蝕も月蝕もある筈であるが、月の軌道面は、地球の軌道面と五度九分ばかりの角度をなして次第に高く次第に低くなつて居り、その上に、月は地球よりも小さく、又、その地球や、太陽との距離も少しづつ違つて居るので、日月蝕が、毎月起らないのである。いふまでもなく、日蝕は、地球と太陽との間に月が入り、月蝕は、地球が月と太陽との間に入つて、一直線上に、若くは、殆んど、これに近い

衝

月の一章
中に起る
日月の蝕

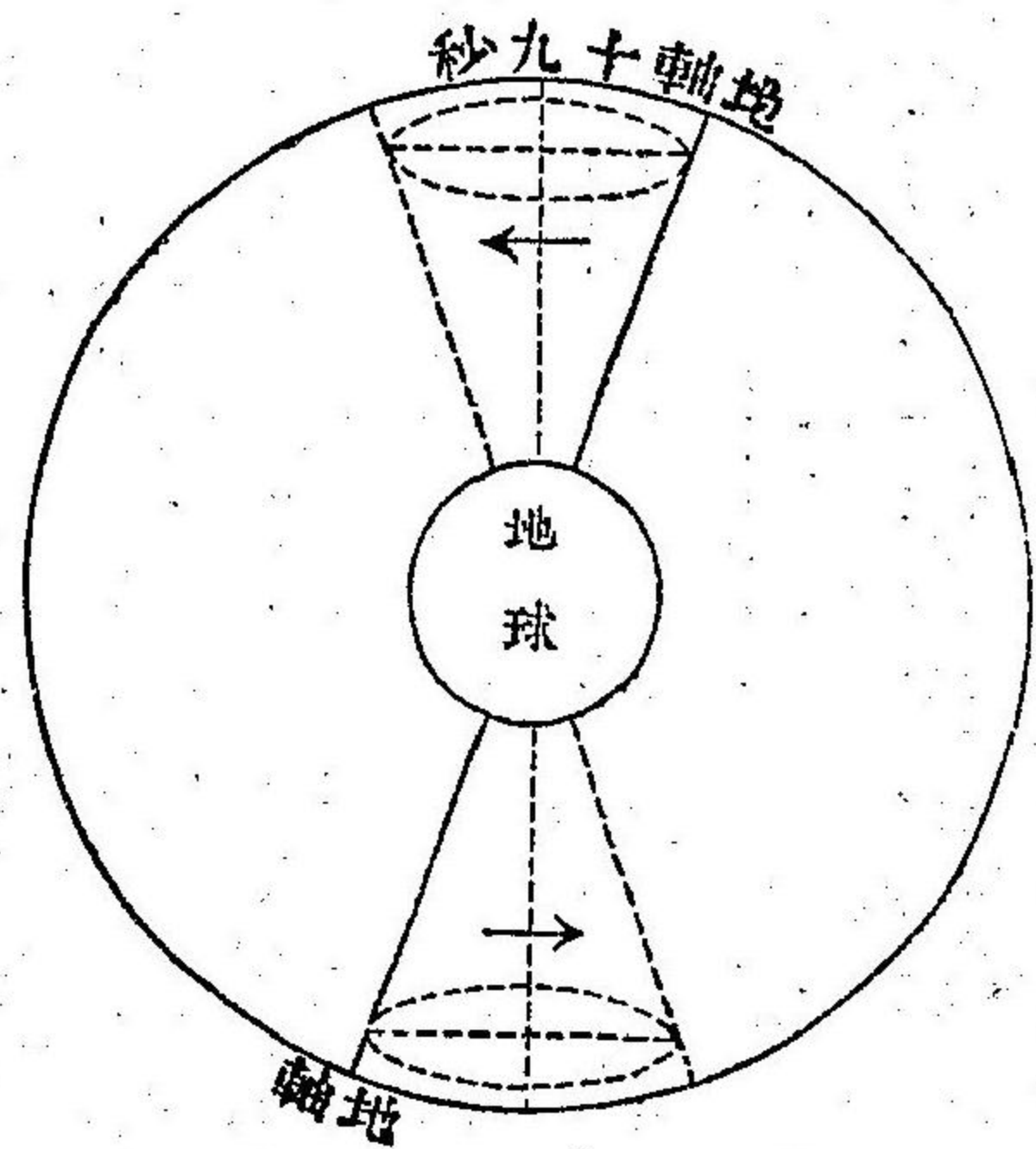
位置にある時に起るものである。而して、月の昇交點が、地球と太陽と一直線になる位置を衝と名づけるが、この場合には、よく蝕が起るものである。この衝は、地球が三百四十六日、十四時五十三分運行すると、再び来るもので、それより、毎年十八日半づつ、早く衝の位置に来る。これは、月の昇交點が毎年、左の方へ移つて行くためである。

月の一章間(十八年三分の一)には、蝕は七十回起る。その中で月蝕が二十九回、日蝕が四十一回である。月の昇交點は、地球の春分點が常に動いて居ると同じやうに、毎月(二十七日七時四十四分十二秒)凡そ一度二十七分ばかり、東の方から、西の方へ動いて居る。これは何故といへば、地球の軸が少しづつ、動揺するにつれて、赤道面が動き、黄道面の傾斜の度にくるひ

地軸の動
搖

が生ずる爲めてある。而して、地軸の動搖する度は、圖に示すやうに楕圓を畫がいて、その長い方の徑が十九秒ばかりある。その有

圖 四 十 第



第一章に地軸の動搖を示す

の地軸の動搖が一周轉するに従つて、月の昇交點も、次第に左の方へと移動して、始め、春分點の處に月の昇交點があつたとすると、そ

度は、恰も時計の振子が、一度左へ行つて、また右に歸ると同じで、一度左の方へ行きて、再び右の方の舊位置に歸るまでの時日は、十八年と、二百十八日二十一時間、即ち十八年と凡そ七ヶ月ばかりである。こ

一章

月の高低

れから、段々北に上つて、また、南に下り、秋分點(月の降交點)を通過して、再びもとの位置(春分點)まで歸つて來る、その間の時日が、矢張り八年と凡そ七ヶ月である。これを約十九年として、一章と名づけるのである。そこで、一章の間のことを曆に作つて置けば、その次の一章の年間は、少しの差はあるが大體同じことであるといふ理由が了解せられるであらふ。

この月の昇交點が、太陽の春分點と一致したのは、近頃では、明治二十七年十月であつたから、それから十八年七ヶ月の間は、一章の間である。次の一章は、明治四十六年五月になる筈である。

序にて、月が、地平線から見える高低に就て説明しよう。これは、月が地球の黄道の上に来る位置によつて、異なるものであるが、それに、月の昇交點は、前にも説明したやうに、常に變はり行くから、これ

月の最も
高き時

月の最も
低き時

も大に、月の地平線上に於ける高低に關係するのである。今、昇交
 點が春分點と一致したとすれば、月の軌道は、地球の黄道と五度九
 分ばかりの傾きであるのと、地球の黄道は赤道と二十三度半ばか
 りの角度であるために、二十八度半ばかりの傾斜になる。そこで、
 東京で見るとすると、東京は、北緯三十五度四十分の所に在るから、
 赤道の高さは、五十四度二十分ばかりになり、之を合はすと、地平線
 上から八十三度ばかりになる。これが、昇交點が、春分點と一致し
 た時で、月の最も高い時である。
 又、昇交點が秋分點と一致する時には、月の軌道は、赤道と十八度二
 十七分ばかりの傾きをなすから、二十三度三十六分から五度九分
 を減じたもの最も低い時で、二十五度四十四分ばかりになるので
 ある。

月の軌道
を周る速
度

それから、満月の時の月が、地平線上に於ける高さは、概していへば、
 夏は低く、冬は高くなるのであると考へて居ればよい。
 月が自分の軌道をめぐる速さは、毎時一様ではない。地球に最も
 近づいた時には速くして、一日に、二萬五千五百里ばかり(十五度に
 當る)地球に最も遠ざかつた時には、一日に一萬九千八百里ばかり
 (十一度に當る)で、之を平均すると、二萬二千七百里(十三度に當る)ば
 かりになる。かやうにして、月がある地の子午線から出發して、再
 び、その子午線上に回歸する間の時間は、毎日二十四時五十二分を
 要する。(但し、ある恒星を目標にして、その恒星が、地球のある子午
 線から、再び、この線に回歸する時間に比べると、月が地球のある子
 午線に回歸するには、日々平均五十二分ばかり(地球に、月が最も近
 い時には、六十六分、最も遠い時は、四十分)後れる。これが潮汐満干

潮汐の説

の時間に關係を有して居るのである。
そこで、こゝに、潮汐のことを、大略説明して置かう。

潮汐の満引は月の引力に依る

潮汐は、月が海面の水を引きよせようとするより起るものである。
（實は太陽の引力も關係して居る）今、月がある子午線上に來たとすれば、其所の海水は、月の引力によつて高まつて來る。これと同時に、その反對の側は、地球の地面を引かれるので、水が取り残されるやうな具合で、自然と海水が高くなる。而して、地球は、常に自轉して居るために、二十四時五十二分の間には、一度は、月に面し、一度は、月に背を向けることになるから、第一回は、月に面した時に潮汐が起り、第二回は、月にそむいた時に、その反對の方から、地球の地面が月に引かれるために、海水が高くなる。故に、一日の中には、二回潮汐がさして、また干るのである。第一回の潮汐がさしてから、第二

潮汐満干の時間

回目の潮汐は、十二時二十六分を経た後に起るのである。

そこで、月の出る時間を知れば、潮汐のさす時間も知られる。今、或日に於て、日と月とが同じ時に地平線の下に沒することがあると假定せよ、その翌日は、日が西に沒してから、凡そ四十八分ばかりして後に、月が西に沒する様になり、かくして、一日ごとに四十分を重ねると、後には、夕方の方が東の方の空にかゝるやうになる。潮汐のさすのも、凡そ是と同じ時間だけ後れるのである。而して、潮汐が満ちて來るのは、大洋の上ではかると、月が三十度位のぼつた時頃から満ち始める。此三十度を時間に直すと、凡そ二時間である。
附記 潮汐の時間を簡單に知るため、世間に、表にしたものが行はれて居るから、参考のために、次に示さう。この表の中には、舊來の時刻で示してあるが、それを、今の時間に改めるには、次の時刻對照

表 照 對 刻 時 舊 新

四 ツ	五 ツ	六 ツ	七 ツ	八 ツ	九 ツ	四 ツ	五 ツ	六 ツ	七 ツ	八 ツ	九 ツ	舊
全 十 時	全 八 時	全 六 時	全 四 時	午 前 二 時	全 十 時	全 八 時	全 六 時	全 四 時	全 四 時	午 後 二 時	正 午 十 二 時	新
巳	辰	卯	寅	丑	子	亥	戌	酉	申	未	午 の 刻	支

表と比較して見れば分る。

表 覽 一 千 満 の 汐 潮 と 出 の 月

十 五	十 四	十 三	十 二	十 一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	朔	日
三 十	廿 九	廿 八	廿 七	廿 六	廿 五	廿 四	廿 三	廿 二	廿 一	二 十	十 九	十 八	十 七	十 六	時
朝	朝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	朝	朝	朝	朝	朝	時
晚	晚	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	晚	晚	晚	晚	晚	時
六 ツ	七 ツ	七 ツ	八 ツ	八 ツ	八 ツ	九 ツ	九 ツ	四 ツ	四 ツ	四 ツ	五 ツ	中 五 ツ	六 ツ	大 六 ツ	満
		二 分	八 分	四 分		六 分	二 分	八 分	四 分		六 分	二 分	八 分	四 分	時
晝	晝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	時
夜	夜	晚	晚	晚	晚	晚	晚	晚	夜	夜	夜	夜	夜	夜	時
九 ツ	四 ツ	四 ツ	五 ツ	五 ツ	五 ツ	六 ツ	六 ツ	七 ツ	七 ツ	七 ツ	八 ツ	八 ツ	九 ツ	九 ツ	干
六 分	二 分	八 分	四 分		六 分	二 分	八 分	四 分		六 分	二 分	八 分	四 分		干

一日の時
刻

昔の時刻は、一日を十二に分けてあるので、それより細かいところをば、一分、二分といふやうに分けて、四ツ八分など數へたのである。又、別に、一日を百に割つて、一刻、二刻、九十三刻など數へ、一刻を、更に百に分けて、一分、二分など稱へて居たのである。

曆の組立

諸天之動一周歴十二時晝夜迭換會
 無停住是有不動之神化為之主也

天經或問

一 太陽曆の組立

一年の日
 數

閏年を置
 く規則

- 一 地球が、太陽に對して、春分點の所で向き合つてから、次第に運
 行して、再びもとの位置の春分點の所へ回歸する間を一個年とし
 て、その日數は、三百六十五日、五時四十八分四十六秒であるが、それ
 を切りすて、三百六十五日を以て一個年としてある。
- 一 この切りすてたる時間が四年目には凡そ一日に少し足りな
 い位になるので、四年毎に、二月の末に一日を加へて閏年として、實
 際の運行の時間に合はせるやうにしてある。
- 一 しかし、一日に少し足りないものを一日にするために、また、四
 百年の間に、三日だけ、四年毎に置かないことにすると、略實際に一
 致するのである。
- 一 右の理由から閏年を置く規則が、次の如く定められて居る。

(一) 西洋紀元年數の、四で割り切れる年を閏年とする。

$1892 \div 4 = 473$. 閏年

(二) 紀元年數の終りに零が三つ付く年は、四百で割り切れる年のみを閏年とする。割り切れぬ年は平年とする。

$1900 \div 400 = 4$. 平年

$2000 \div 400 = 5$. 閏年

附 日本紀元年數は、西洋のより、六百六十年だけ多いから、次の規則が設けてある。

(一) 日本紀元年數の、四で割り切れる年を閏年とする。

$2560 \div 4 = 640$. 閏年

(二) 紀元年數より六百六十を減じて、百で割り切れる中で、更にその答が、四で割り切れぬ年は平年とする。

$2560 - 660 = 1900 \div 100 = 19$. 平年

$2660 - 660 = 2000 \div 100 = 20$. 閏年

$2860 - 660 = 2200 \div 100 = 22$. 平年

一日は、二十四時間としてある。これは、地球の一周轉する實際の時間を平均して端數を除いたものである。

一ヶ月は、二月を平年で二十八日、その他の月は大小の二つに分けて、大の月を三十一日、小の月を三十日として、之を合せて三百六十五日となるやうにしてある。月の大小は毎年一定して居つて變化はない。

大 一月 三月 五月 七月 八月 十月 十二月

小 二月 四月 六月 九月 十一月

一月一日は、春分點でもなく、近日點でもなく、全く他に關係の

一日の時

月の大小

一月一日

ない所に太陽と地球とがある時に定めてある。これは昔しギリ
ザの時代に、天文学者のソシゼニースといふ人が、月と地球との
關係を參酌して定めたもので、今日では、この點が、近日點に、餘程近
くなつては居るが、後には、また次第に別れるもので、氣候とも、別段
關係ないのである。

春分秋分
夏至冬至
七曜の名

一 春分は三月二十一日、夏至は六月二十二日、秋分は九月二十三
日、冬至は十二月二十二日と定めてある。年によつて一日位は違
ふが、毎年殆んど同じである。これは、太陽が地球の上に来る度に
よつて定めたものであるから、餘程便利である。

一日は、七曜を割りあてゝある。
日曜 Sunday 太陽日の意である。
月曜 Monday 太陰日の意である。

火曜 Tuesday 軍の神の *Tiw* といふより來た名である。

水曜 Wednesday 暴風雨の神の名 *Odin* から來たのである。

木曜 Thursday 雷神 *Thor* の日である。

金曜 Friday 婚姻の神 *Freyr* の日に當る。

土曜 Saturday 時を司る神 *Saturn* の名である。

七曜の起
原

尙ほ、詳細に説明すると、週日を設けたのは、七個の遊星によつたも
ので、その名稱も、この遊星からとつたといふ説もあれば、月の盈ち
たり虧けたりするのが、約七日毎に起るから、それを基にしたので
あるといふ説もある。古く、バビロニア人は、七日を一週日として
その名稱は、太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星といつて居つた。猶太
人は舊約聖書にある如く、神が天地、人やその他のものを作るに六
日かゝつて、七日目には安息したといふ、天地創造説によつて、毎週

の最終日を、一般の安息日と定めて、その安息日を「サバット」と名づけ、その他の日には、名称を付けないで居たが、後には「アルファベツト」の初めから第六番目までの文字を以つて呼ぶやうになつた。
 希臘人は、初めは、十日を一週とし、羅馬人は、八日を一週としたが、後に埃及から、七日を一週とすることが傳はつた。セルマン人は、羅馬人と交通するより以前から、七日を一週日としたらしいが、後に、佛蘭西人から、羅馬人が使つて居る一週日の名稱を傳へて、それを、セルマン語で呼んだらしい。

基督教徒は、羅馬から七日を一週日にすることを傳へて、これに「フエリア、プリマ」(第一祭日)「フエリア、セクンダ」(第二祭日)などいふ名稱を付けたが、第一日は、基督が蘇生した日であるから、紀念のために、「ヂニス、ドミニカ(主の日)」といふ名を付けた。これが羅馬人が月曜

日と呼ぶ日である。(ヂニス、ソリス)それ、七週日の名稱は、基督教が傳播するに伴うて、一般に使はれるやうになつたのである。
 この七曜は、日曜を繰り出しさへすれば、他は推して知られる、日曜を繰り出すのに、次のやうな方法がある。

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
	22	23	24	25		26
27	28	29		30	31	32
33	34	35	36	37		38
39	40	41		42	43	44
45		46	47	48	49	

一月	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ
五月	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	ト
八月	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	ト	ヘ
三月	ニ	ハ	ロ	イ	ト	ヘ	ホ
十一月	ハ	ロ	イ	ト	ヘ	ホ	ニ
六月	ロ	イ	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ
十二月	イ	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ
七月							

日曜表	1日	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

七曜の繰り方

先づ第一表には横に、年次を書き入れて、閏年のある時には、その次を一欄明けて置いて、上のイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、トの符合に一致させて置く、ロの下に二十二とあるのは、明治二十二年のことで、日本紀元で、二千五百四十九年に當るのである。

次に第二表は、二つに分れて居る。上の表に、ト、ヘ、ホ、ニなどあるのは、第一表の年の符合に當り、一月、十月など、あるのは、その符合に當る年の月を示したのである。下の表に12とあるのは上の表のト、ヘ、ホなどの年の、或月に當る日曜日である。

そこで、この表を繰るには、たとへば、明治四十二年十一月三日は何曜であるかを繰り出さうとすれば、第一表の42の欄を見出すと、上にホの符合がある。それを、第二表の上の表で見出すと、ホは幾つもあるが、しかし、一月とか二月とか月が違ふによつて、ホのある位

置が異なつて居る。そこで、十一月の處を横に見ると、ホは向つて右の一番端の欄にある。よつて、下の表を見ると、7 14 21 28とあるのが、即ち日曜日である。之を實際の曆に合せて見ると、十一月七日は日曜日であるから、三日は月曜日であるといふことが、すぐ知れる。但し、月が小で三十日しかない時に、(一)三十一日が日曜に當ることがある。その時は三十一日の日曜は除くのである。(二)又、閏年の三月から後の日曜日を知るには、第一表で、その年の次に明けてある欄の上にある符合を見て、第二表について見出すのである。

(一) 明治二十七年六月は三十日なるに、第二表には、三日、十日、十七日、二十四日、三十一日とあるから、三十一日は除く。

(二) 明治四十一年は閏年であるから、第一表の二の符合を見て、第二表について見出すと、二は三月にては、一番目にあるから、日曜

は、一日、八日、十五日、二十二日、二十九日であるといふことが知られる。若し、二月であるならば、第一表のハの符合であるから、第二表では二月の第二番目の下の、二日、九日、十六日、二十三日が日曜に當る。

二 太陰曆の組立

太陰曆は、月が、日と會して朔となるより次の朔までの運行の時間を基礎とし、之に日が一周年(實は地球が太陽の周圍を一周するの)である)する時間とを參酌して組み立てたものである。

一 月が朔から次の朔までの運行の時間は二十九日十二時四十分三秒であるから、之を十二倍日が一周年する間に月は十二回日と會して朔があるによつてして三百五十四日八時四十八分三十六秒になるものを、端數をすて、三百五十四日を以て一個年と

一年の日
數

してある。

月の大小

一 一ヶ月は、大と小とに分ち、大を三十日、小を二十九日にしてある。その大小の定め方には、古から色々あつた。古くは一大一小といつて、一月を大とし、一月を小とし、大小を交互にしたが、次に、三大二小を定とした。唐の時代(今から千二百餘年前)になつて、四大三小の方を定めた。元來この月の大小は、月の一周轉の時間二十九日十二時四十四分三秒の端數を去つて、二十九日として計算するため、十二時四十四分三秒づゝの差を、實際に合すやうにする方法である。四大三小の方によると、七ヶ月で二百六日十七時八分二十一秒が、月の周轉の時間で、曆面では二百七日になるから、十七時八分二十一秒だけの差になるのである。しかしこの差も積つて朔の時刻に相違を來すから、實際の運行を推歩して定

あるやうになつて居る。今一例を示すと、ある日の夜の零時に日と月と會して、朔になつたとすれば、二十九日十二時四十四分三秒にして、再び會する。この内二十九日は、前の夜の零時まで、あるから、十二時四十四分三秒は、三十日目になるのであるが、未だその日の夜の零時に及ばないから、小の月として、十二時四十四分三秒は、次の月の朔にする。これから更に、二十九日十二時四十四分三秒を過ぎると、再び朔になる。その時日は、三十日月の夜の零時を過ぎること一時二十八分十二秒の時になるから、この月は大とするのである。しかし、緯度が違ふに従つて、その時刻が相違するので、月の大小を定めることは、この計算の通りにはゆかないのである。緯度の相違ばかりでなく、月の運行も、地球に近い時と遠い時とによつて、速度が違ふ。地球も亦速度に遅速があり、月の軌道、地

の大小

閏月を置く理由

閏月を置く法

球の黄道の工合も、常に少しづつ違ふから、計算は申々面倒である。一、太陽の一周天實は地球が太陽の周圍を一周するのであるの時日は、春分點から春分點までが、三百六十五日五時四十八分四十五秒であるのに、月が十二回轉する間の時日は、三百五十四日十二時四十四分三秒とすれば、一年の中に、十日十七時四分四十一秒餘の不足が生じて来る。之を足さないと、季節が合はなくなる。そこで閏月といふものを置くことになつて居る。即ち三年目に一ヶ月か、又は、五年間に二ヶ月の閏月を置くのである。とにかく、前に説明した一章十八年七ヶ月の間、月の昇交點が一周する時日に七ヶ月の閏を置くことに定めてある。その閏月を置くには、二十四氣の中で中氣(後に説明するが、俗に正月の中とか、二月の中とかいふ氣節のことである)のない月の朔の

時を見て置くのである。

附 支那の従來の曆法では、一個年三百六十五日餘を二十四に分けて、之を氣節と名づけ、節が十二、氣が十二である。一氣が十五日、二一餘になる。之から十五日(一氣を十五として)を減ずれば、二一餘が残る。之を盈分とし、二十四倍すると、五日、二五餘になる。これが一個年の氣盈である。又、月の一周轉する時間二十九日十二時餘は、三十日に足らざること十一時餘で、之を十二倍すると、五日、六三餘になる。これを朔虛と名づける。氣盈と朔虛とを合して、十日十七時四分餘になる。これが一個年の閏餘といふもので、これが三年目には、三十日餘になるから、閏月を置くことにしてある。

それから、冬至が十一月の朔に近い時には、閏月の來ることが、遅

く、遠い時には速く、朔より十七日以上なれば、閏月がある年と知れ。それは、毎年の閏餘十日十七時ばかりを十二ヶ月に割り當てると、一ヶ月に、〇、九〇六ばかりになる。今十一月二十日が冬至とすれば、これにこの〇、九〇六を次第に加へて二十九日餘になる月が閏月になる筈であるから、八月が閏月に當るのである。但し、中氣のなき月を閏とするのであるから、多少違ふこともある。

例 明治三十年十一月二十八日冬至 (朔に遠し)

全三十一年 三月閏 小

全三十二年十一月二十日冬至 (朔に遠し)

全三十三年 八月閏 小

この三十三年の閏は、早くある筈であるが、中氣のない月が無い

ので、八月にしたのである。即ち八月の三十日が八月の中で、閏八月には、九月の節が一つあるのみで、九月の中は、九月の二日に當るからである。

曆元

太陰曆で、曆の元になるものは、冬至である。之を曆元といふて居る。冬至は、太陽が南下して南回歸線の上を直射する時で、北半球では、晝の最も短い時である。之を陰陽でいへば、陰の極まつた時で、これから、次第に一陽來復して、漸次陽氣に向ふ時である。しかし、今は、普通に春分點を基點にして、氣節などを分けるやうになつて居る。

元旦

太陰曆で正月の元旦を定めるのは、昔は、北斗の杓が子の方位を指す時や、或ひは、丑の方位、寅の方位を指す時などで定めたが、今では、冬至を過ぎてから後の朔に當る時を以て正月元旦としてある。

二十四氣節

それ故、その點は、年々移動して一定して居ないのである。

以上説明した處で、略月の大小、閏月のことは了解せられたであらう。尙春分から春分までの間を二十四の氣と節とに分けてある。次に、是等のことを説明しよう。

一年を四つに分けて春夏秋冬とし、その一つづつを六つに分けて氣とし、一氣を更に三つに分けて、その一つづつを候とす。故に一年は四季、二十四氣、七十二候になる。これは、要するに、氣候の差異から來たものである。しかし、我國では、七十二候は用ひないで、ただ二十四氣だけを、古來用ひて、農業上などには、中々大切なものになつて居る。

春分

春分シュンブン 地球の赤道と黄道と交叉した點に太陽が直射する時で、こ

こを春分點と名づける。太陰曆では、毎年三月二十一日頃である。

俗に、この春分に當る日を春の彼岸の中日と云つて居る。また、我國では、この日を春季皇靈祭と定めてある。

彼岸とは、曆法には無きことにて、これは佛教より來たことである。印度にては、二月と八月との二度に、各々七日の間佛事を營み、衆生に説法をする風習があるが、これを曆日に結びつけて、春分前三日、後三日、都合七日の間を彼岸と稱して、祖先の靈を祭り、寺に詣てしむることとしたのである。

清明 これは、いはゆる三月の節といふもので、太陽が北緯六度十九分ばかりのところを直射して居る時である。清明とは、春の陽氣になりて、天地が晴れわたるといふ意味である。

穀雨 三月の中で、太陽が北緯十一度三十分位のところにある。穀雨とは、春の雨が、よく百穀を生ずるといふ意味である。

立夏 四月の節で、太陽が北緯十六度四十分位の處に在る。立夏とは夏の氣になるといふ意味である。

小滿 四月の中で、太陽が北緯二十度二十分位のところに在る。

芒種 五月の節で、太陽は北緯二十二度四十六分位のところに在る。

夏至 五月の中で、太陽が北緯二十三度三十一分位のところに在る。こゝが、太陽が北の方を直射する最極度で、晝が最も長く、夜が最も短く、而して太陽曆では、毎年六月二十二日頃に當る。夏至とは日の長さ至りであるといふ意味である。

小暑 六月の節で、太陽が北緯二十二度四十六分位のところに在る。即ち次第に南の方へめぐりかへることが知れる。大暑にな

大暑 七月の節で、太陽が北緯二十三度四十分位のところに在る。大暑とは、夏の氣になるといふ意味である。

大暑

る前であるから小暑と名づける。
大暑 六月の中で、太陽北緯二十度十二分位のところに在る。暑さが甚だしいので大暑と名づける。

立秋

立秋 七月の節で、太陽は北緯十六度四十分位のところに在る。即ち恰も立夏の時と同じ處に在るのである。秋の氣が立つので

立秋と名づける。

處暑

處暑 七月の中で、太陽が北緯十一度三十分位の處に在る。處は「しりぞく」意にて、暑さが漸くしりぞくのである。

白露

白露 八月の節で、太陽は北緯六度十九分の處に在る。露の降る頃となるより白露と名づける。

秋分

秋分 八月の中氣にあたる時で、太陽が次第に南に移らんとして、春分の時と同じ點、赤道と黄道との交叉して居る處に在つて、そこ

寒露

を直射する時である。これを俗に秋の彼岸の中日として、その後三日宛を合せた七日を彼岸と稱へて、祖先を祭つたり、寺詣てをすることは、春分の時と同じである。我國では、この日を秋季皇靈祭と定めてある。

霜降

寒露 九月の節で、太陽が赤道より南に移つて、南緯六度十九分のところに在る。此から、太陽は次第に南へ進んで二十三度三十一分の處まで行くのである。氣候が次第に寒さに近づき露も寒冷になるより名づける。

霜降

霜降 九月の中、太陽南緯十一度三十分。霜が降る頃となるより、霜降と名づける。

立冬

立冬 十月の節、太陽南緯十六度四十分。冬の氣が立つので、立冬と名づける。

小雪 大雪 冬至

小雪シヨウセツ 十月の中、太陽南緯二十度十二分。雪が降り初める意。

大雪ダイセツ 十一月の節、太陽南緯二十二度四十六分。

冬至トウジツ 十一月の中、太陽が南緯二十三度三十一分の處迄進んだ時

で、前の夏至と、全く反對に、北半球は、晝が最も短く、夜が最も長い時である。而して毎年太陽曆では十一月二十一日頃に當る。日が南下して、晝が短き至りなる故冬至と名づける。

小寒シヨウカン 十二月の節、太陽少し北にかへり、南緯二十二度四十六分の處に在る。

大寒ダイカン 十二月の中、太陽南緯二十度十二分。

立春リツシュン 正月の節で、その前日の夜を節分といつて、春の時候に移る境界である。それ故に、節分と名づける。

雨水ウスイ 正月の中で、太陽南緯十一度三十分の處に在る。雨水とは

雨水

立春

大寒

小寒

驚蟄

陽氣のために雪や氷が解けて、雨水となる故に、名づける。

驚蟄キョウジツ 二月の節で、太陽南緯六度十九分の處に在る。驚蟄とは、啓

蟄とも書いて、冬籠りをして居た蟲などが、地をひらいて、出るやうになるからである。

太陽は、冬と夏とでは、運行する速さが違つて居るので、夏は一つの氣節が十五日七分ばかり、冬は十四日八分ばかりになる。中氣か

ら次の中氣までの日は三十日餘となり、二十九日餘となる差異が生ずるのは、これがためである。即ち九月の中霜降から、十二月の

中雨水までは、中と中との間が二十九日餘で、正月の中から八月の中までは、三十日餘である。

二十四氣節の外に、氣候を知るに必要なものがある。左に之を示さう。

土用

土用とは、一個年三百六十五日餘を五行に配して、その一行が七十三日餘になる、而して春を木、夏を火、秋を金、冬を水とすると土だけは、四季の外になる。そこで、この七十三日餘を四季に割り當てると、十八日餘になる。之を三月、六月、九月、十二月の各節になつた時から十三日目より、十八日餘の間とする。太陽曆では、毎年一月十八日、三月十八日、七月二十日、十月二十一日頃と定まつて居る。故に土用は、四季ともにあるが、夏の土用が最もよく人に知られて居る。又、土用の入りといふのは、その月の節から、十三日目で土用になつた日のこと、十八土用、十九土用などいふのは、土用の入りの時刻が遅れて居ると、それから十八日餘になる時刻が十九日目になるからである。

これは支那の陰陽五行から出たものであるが、又、冬至から、月の一

半夏生

周轉即ち凡そ二十七日餘、約二十八日目が春の土用となり、それから三ヶ月目ごとに、土用があるのである。

半夏生

五月の中より十一日目に、恰も太陽が最も地球より遠ざかつて居る日にあたる。これを半夏生といふは、もと半夏といふ草の生ずる頃なるよりいつたものである。しかし、太陽の運行のありさまからいへば、丁度遠日點に當つて、夏の半分位の時になるのである。太陽曆では、毎年七月二日に當つて居る。

入梅

入梅 俗に「つゆ」といふ。五月の節から六日目よりこの「つゆ」になつて、三十一日間ある。この氣節には、我國は、雨がよく降るのである。

八十八夜

八十八夜 立春即ち正月の節から八十八日目をいふ。この時節頃になると、霜の降るのも止んで、漸く暖かくなるのである。八十

八が米の字に當るので、農家には、一方氣節の上からと、一方では迷信の上から、大切なものになつて居る。八十八夜を、名残の霜といふのは、霜が降らなくなるからである。太陽曆では、毎年大概五月二日に當る。

二百十日

ニヒヤクトウカ

これは、立春即ち正月の節から二百十日目で、この時節には、日本では、稻の花の咲く時期であるから最も大切な日になつて居る。それに、この時季には、日本には、よく暴風が吹くので、農家の稲作の豊凶を占なふ日にする。これより前十日目を前十日とし、後十日目を後十日といふ。或ひは後十日を二百二十日ともいふ。

社日

シヤチ

これは春と秋とに一度づゝあるが、もと支那で、二月と八月に、五穀の神を祭つたことがあるのを、ならつたものである。それ

ゆゑ春の社日は、春分に近い戊ツチノエの日、秋の社日は、秋分に近い戊ツチノエの日を當てゝある。つちのえの月にあてたのは、土を司る神を祭るといふ意から來たもので、曆法には更に關係がない日である。

一元一章

イチゲン

イチシヨウ

太陰曆には、年にも日にも干支を配當してある

が、干は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、申、壬、癸の十で、支は、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二である。これが、甲子の年から始まつて、復た甲と子が重なる年は六十一日目であるから、六十年を以て一元としてある。これは十と十二との何れでも割りきれぬ数の中で最も小さい数が六十であるによつてである。別に何の意味もないのである。近いのは、元治元年が甲子の年に當つて居るから、それから繰つて見ると直に知れる。日の方は、明治四十二年十二月三十日が甲子であるから、それから推して知られる。

一章のことは、已に前に説明して置いた如く、月の昇交點が一周する間をいふので、近頃では、明治二十七年十月にこの昇交點が、春分點にかへつて來たのであるから、この時を基にして、推歩すれば、今より明治四十六年五月までの一章の間のこととは、よく知れる筈である。又今より十八年七ヶ月以前即ち明治八年四月より全二十七年十月までの曆で、明治四十六年五月までのことは、大略推すことが出来る理である。

紀元

紀元 紀元といふのは、その國を建てた年を初年として數へ始める元である。我國では、神武天皇の御即位の年を紀元元年として、それより以前を紀元前何年とするのである。西洋では、この紀元が、國によつて違つて居る。現今では、一般に、耶蘇教の行はれて居る國では、耶蘇の生れた日を紀元元年として計算することになつ

耶蘇紀元

て居る。この耶蘇紀元の外に、オリンピア紀元、セレキウス紀元、ヘッラ紀元、ローマ紀元といふやうなのがあつて、ヘッラ紀元は、回教國の人民は、今もこれを用ひて居る。朝鮮では、今の皇帝の祖先李氏が國を開いた年を開國元年として、今年は五百十八年に當るのである。

世紀

世紀 一世紀といふのは、百年をいふので、支那の一元を六十年とするのとは、その趣が違つて居る。

曆の上段
中段
下段

尙ほ、曆の上段には、干支のこと、中段、下段には、日の吉凶、方位の吉凶などをあてゝあるが、これは、曆術と關係あるものではなく、後に陰陽方位などの説を附け加へたものである。これらの事は、後に附説することにしてしよう。

参考のために、次に、明治四十三年から行はれる太陽曆によつて、太

四十三
年
行は
れる
太陽
曆の
繰り
方

陰曆の月の大小、月の盈虧、閏月などを繰り出す方法を説明して置かう。

月齡

月齡 月齡といふことが、明治四十三年の太陽曆に載せてあるが、これは、前に、曆の基礎の所で説明して置いたやうに、月は、朔から次の朔までの周轉には、二十九日十二時四十四分三秒ばかりの時間を要するので、ある日の正午に於て、地球と、月と太陽とが重なつて、地球からは、月の光りが、少しも見えない闇黒の時が、いはゆる朔なので、この時が、人間の生れるのにたとへていはゞ、母の胎内から出たまゝの時、まだ一つには數へられぬ時である。それから次第に、月が、地球と太陽との間を離れるに従つて、その光りが見えるやうになる。このありさまを名づけて月齡といつたので、人間の年齢と同じやうなものである。元來太陽曆では、古くは、ある日の真

舊曆の日を知る法

夜半子の刻に於て、地球と、月と、太陽とが相重なる時を算出して、月齡を定めたのであるが、回々曆や、太陽曆の方では、その日の正午の時を以て計算することになつて居る。そこで、明治四十三年の本曆の凡例にも『月齡は、本邦中央標準時正午の時即ち朔より起算したる日數』としてある。

略曆に月齡を、○から、二十八、又は二十九としてあるのは、月の周轉する時間を示したもので、○とあるのは、まだ、一日にはならない、従つて、地球からは、光りが見えない時である、本曆には、○の所に、○六としてあるが、これが正しく、その時間を示したもので、一日に足りないことが知られる。しかし、この○の時が、舊來の朔で、いはゆるその月の一日に相當するのである。故に、月齡の一とある日は、二日、二とある日は、三日である。かやうにして、次第に一を加へて

月の大小を知る法

閏年を知る法

ゆけば、舊曆の日は知ることが出来る。

月の大小を知るには、月齡が二十八で終つて居る月は、これに一を加へると二十九日で、即ち小の月である。又、月齡が二十九で終つて居る月は、之に一を加へると三十日で、大の月である。

略曆には、朔と望と、上弦と下弦とが記してあるから、その朔の時が、一日で、(月齡では〇の時)望の時が十五日であると知ればよい。即ち望の日は、月齡の十四のところ、之に一を加へると十五日になるのである。明治四十二年十二月三十一日は、太陰曆では、十一月十九日であるから、明治四十三年の一月一日は、太陰曆の二十日に當る筈である。それが、四十三年の略曆には、月齡のところ、十九と記してある。即ち之に一を加へると二十日になる。閏のある年を知るには、前に説明した如く、二十四氣節の中で、中氣

中氣

月の大小

氣節

のない月があれば、その年は閏があつて、その中氣のない月が、閏月になるのである。明治四十三年には、中氣のない月がないから閏月は無いのである。念のために、その中氣だけを示さう。

雨水(正月中) 春分(二月中) 穀雨(三月中) 小滿(四月中) 夏至(五月中) 大暑(六月中) 處暑(七月中) 秋分(八月中) 霜降(九月中) 小雪(十月中) 冬至(十一月中) 大寒(十二月中)

かやうにして、試みに、明治四十三年の月の大小を計算すると、次のやうになる。

大 四十二年十二月 四十三年二月 五月 七月 九月 十月
小 四十二年十一月 四十三年正月 三月 四月 六月 八月
又、氣節は、左の如くである。

正月元日 (二月十日)

小寒 一月六日 (十一月二十五日)
 大寒 一月二十一日 (十二月十日)
 節分 二月四日 (十二月二十五日)
 初午 二月十日 (舊二月ならば八日 (新三月十八日))
 八十八夜 五月三日 (三月二十四日)
 入梅 六月十二日 (五月六日)
 夏至 六月二十二日 (五月十六日)
 半夏生 七月三日 (五月二十七日)
 二百十日 九月二日 (七月二十九日)
 冬至 十一月二十三日 (十月二十二日)
 彼岸 三月十八日 (二月八日) 九月二十一日 (八月十八日)
 八せん 二月十六日 (正月七日) 四月十七日 (三月七日) 六

月十六日 (五月十日)
 八月十五日 (七月十一日) 十月十四日 (九月十二日)
 十二月十三日 (十一月十二日)
 社日 三月二十四日 (二月十四日) 九月二十日 (八月十七日)
 其他、二十四気節、日の干支などは、悉く従來の通り、載せてあるから、
 明瞭に知ることが出来る。
 曆の組織などには、餘り關係は無いが、氣節を知るには、必要な處が
 あるから、四季の名稱や、月の名稱の起原などを次に説明すること
 にしよう。

四季及び月名

四季の名稱

春 春の字の音は蠢シユンと同じで、蠢は蟲が動くことゆゑ、春は物が次第に動き出すより名づけしなり。異名を青陽ともいふ。方位に配すれば、東にして、十干に配すれば甲キョウ乙キョウである。甲乙は木で、木は春に盛んにして、その色が青い。そこで春のことを青陽とも青春ともいふのである。東方の神を大皞ダイコウと名づけて、春を司る神である。和名のはるは草木が張り出るからであらふ。舊曆では、正月、二月、三月を春としてある。春三月を合せて發陣ハツジンと稱へる。萬物が發生するからである。

春

夏

夏 夏の字は假の字と同じ音で、假は大きいといふ意である。夏は萬物が大きくなるからであらふ。異名を朱明ともいふ。方位に當てると南方である。十干では丙ヘイ丁テイで、火に屬する。火は夏が盛んにして、その色は赤い。夏の神を祝融シュウリウといふ。和名になつといふは「あつし」といふ意にて、「な」「あ」とかはつたのである。夏三月を合せて蕃秀ハンシュウと稱へる。萬物が繁茂するからである。

秋

秋 秋の字の音は收シュウの字の音と同じで、收める意、萬物が成熟するから收斂するのである。異名を白藏ハクザウと名づける。方位に當てると西で、十干に當てると庚カウ辛シンになる。庚辛は金である。金は秋に盛んにして色は白い。西方の神を蓐ソと名づける。和名にあきといふのは、氣が澄わたりてあきらかなるからであるといふ説がある。舊曆で、七、八、九月が秋である。秋三月を合せて容平ヨウヘイといふの

冬

は、天地の氣が明かであるためである。
 冬は終の意で、萬物が終藏するからである。異名を玄英と名づける。方位に當てると北の方で、十干では壬癸である。壬癸は水で、水は冬に盛んにしてその色は黒い。北方の神を玄冥と名づける。和名にふゆといふのは、ひゆる意で、ひとふがかはつたのである。冬三月を合せて閉藏と稱へる。

月の名稱

一月

一月 一月を正月といふのは、王者が正に居るといふ意味である。また、正は長と訓ずるのであるともいつて居る。これは支那の堯舜の時代から既に正月としたらしい。異名には孟春、端月、陬月などある。又大簇といふこともある。これは、律の名である。その起原は、支那の黃帝の時に、伶倫が竹で、長

短十二の筒を作つて、それを吹いて、聲の長短清濁によつて、その聲を陽六つと陰六つとに分けて、氣の應ずるのをはかつたといふのである。後漢志といふ書に、室を三重にして、戸を閉ぢて、間隙を塞いで、緹縵を布いて、木を以て按として、筒を一つづゝ置いて、内は卑く外は高くして、方位に従つてならべてある。葭桴の灰で、その内端を抑へて曆を按じて之を候ふ。氣が至る者は灰が去るといつて居る。六律といふのが、陽で、黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射である。六呂といふのが陰で、大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘である。この六律六呂の月の配當は、これからつきゝに説明する。大簇は正月の律で、大いにあつまるといふ意で、萬物が始めて、大いに地にあつまるといふのである。

日本では、正月を睦月といふが、これは、貴き人も賤しき人も行き交

ふゆゑに、むつび月といふ意であると、清輔といふ人はいつて居るが。初月の意味であらふといふことである。「うひ」とは、初めのこととて、歳の始め、月の始めであるからである。

二月 異名を仲春如月、令月といひ、夾鐘ともいふ。夾鐘とは、律の名で、夾とは孚甲で、萬物が、少しづつ芽をふき出して、種類が分かれる頃であるから名づけたのである。

和名を衣更著といふのは、餘寒のために、衣服を更に加へるといふ意であるといふ説もあるが、眞淵の説に、木や草の發月であるといふのが正しいやうである。

三月 異名を季春とも、病月とも、蠶月ともいふ。律は姑洗である。姑洗とは、姑は古いもの、洗は新鮮なもので、古いものが新しくかはるといふ意である。

和名を彌生といふのは、草木がいよゝゝ生長するからである。

四月 異名を孟夏、余月、乾月といひ。律の名を仲呂といふ。これは、陽の氣が極まつて古きを以て、中に復するからである。

和名を卯月といふのは、卯の花の盛りなる頃故、卯の花月といふのを略したのである。

五月 異名を仲夏、阜月、鶉月といふ。律の名を蕤賓といふは、陽氣が上り極まつて、陰氣が始めてくためである。

和名をさつきといふは、早苗月の略にて、田に苗をつくる頃なればしかいふのである。

六月 異名を季夏、且月、伏月といふ。律の名を林鐘といふは、萬物が成熟して種類が林の如く多きをいふのである。

和名を水名月といふのは、暑くして水が加れるためである。

六月

五月

四月

三月

二月

七月

七月 異名を相月ソウグヱツ、孟秋涼月モウシュウリョウグヱツといふ。律の名を夷則イソクといふは、夷はそこなふ意、則は法則にて、萬物が始めて傷うて刑罰を被るといふ意で、少しづつ草木が黄ばんで葉も落ちるやうになることである。和名を文月フツキといふのは、七夕の星祭のある月であるから名づけるといふ説は正しくない。穗合月ホツグミの略で、草木の實が熟する。穂を合むといふ意であるといふ、眞淵マヒコの説が正しいやうである。

八月

八月 異名を仲秋チュウシュウ、壯月ソウゲツ、橘春キツハルといふ。律の名を南呂ナンリョといふは、陽氣がなほ齊麥を生ずるので、陰が之をふせぐといふ意である。いひかへると、まだ暑さが去らないといふことになる。

和名を葉月ハヅキといふのは、木の葉が紅葉となり、少しづつ落ちるからであるとの説もあり、穗發月ホツハツキの略であるといふ、眞淵マヒコの説もある。

九月

九月 異名を季秋キシュウ、玄月ゲンゲツ、菊月キクグヱツといふ。律の名を無射ムセキといふは、萬物

が陽氣が去るにつれて終り、陰の氣が動くにつれて起るといふ意である。

和名を長月ナガツキといふのは、夜がだん／＼長くなるからであるといふ。谷川士清ヤノカハシキヨの説と、穗かり月の意であるといふ、眞淵マヒコの説と、稻熟月イヌカクグヱツといふ意であるとする、宣長の説がある。

十月

十月 異名を孟冬モウトウ、陽月ヨウグヱツ、良月リョウグヱツといふ。律の名を應鐘オウショウといふは、鐘は、動く意で、萬物が陽氣に應じて動いて下にかくれるからである。

和名を神無月カミナシグヱツといふのは、この月に、全國の諸神が出雲國に集まり、たまふゆゑに、しか名づけるといふ説や、伊弉册尊イサナノミコの崩御の月であるために、しか名づけるのであるといふ説もあり。又、眞淵マヒコの、雷カミナリなし月とて、雷の鳴ることがなくなる月であるといふ説もある。別に、神嘗月カミナヒグヱツといつて、新穀を神に奉る月であるからの名であるとい

十一月

ふ谷川士清の説もある。
十一月 異名を仲冬チウトウ、辜月コツキ、復月フクツキといふ。律の名を黄鐘コウシヨウといふは、陽氣が黄泉の下に動いて、よく萬物を動養するといふ意である。

十二月

和名を霜月シヨウツキといふのは、霜降月の略である。
十二月 異名を季冬キトウ、除月シュツツキ、嚴月エンツキといふ。律の名を大呂ダイリョといふは、呂を防ぐことにて、陽氣が出てんとするを、陰が大いに妨げるからである。

和名を師走月シユヰツキといふのは、真淵の年極月マシヅメノトシノキマツキといふのが正しいやうである。

雜

說

天地陰陽革まらず。而して萬物を成す
 こと同じからず。目、其の故きを失はず。
 而して白黒の殊なるを見る。耳、其の舊
 を失はず。而して清濁の聲を聞く。

呂氏春秋

五星 世俗に、霄の明星、或ひは曉の明星といふのは、五星のことて

星辰に關するもの

天文や曆術は、前に説明したやうに、人間の生活上、時を知るといふ
 事には最も必要なもので、何れの國でも、早くから研究せられて居
 たのである。而して支那では、この天文に就ては、早くから、天地の
 氣と人間とは同じ陰陽の氣であるから、相通じたものである。そ
 こで、天の星辰の象は、人間の日々の思つたり、行ふたりすることと
 關係して、天子の政治が善ければ、天象が正しく、政治が亂れると、天
 象に異變があらはれる。又、人々の行爲の善惡も關係するもので
 あると考へて、星辰を祭り、又、星のめぐりなどによつて吉凶を判断
 することが行はれて居た。今、これらのことに就いて、その著しい
 ものだけを、参考のために説明しよう。

ある。五星とは、木星、火星、土星、金星、水星の五つで、地球に最も近いのが水星で、それから金星、火星、木星、土星といふやうになつて居る。今、これらの星がめぐる週期を示すと、地球の週期を一と定める時は、水星は〇、二四年、金星は〇、六二年、火星は、一、八八年、木星は、一、一、八六年、土星は、二、九、四六年である。

而して、これらの星が、太陽の前後に近い時は、地球から見る時に、太陽と前後してあらはれる位置に來た時、太陽の光りに奪はれて、よく見えなくなる。太陽と位置が離れると、光りがよく見える。各太陽が西に去る時は、晨にあらはれ、太陽が東の方に去る時は、夕方に見える。木、火、土の三星は、晨に東に見えて、日を経るにつれて西に移つて、又、夕方に東に出て西に移つては、西に見えなくなるが、金の二星は、晨に東に出て、東に光りが見えなくなり、夕方に西に出

木星
(歳星)
八將神

金星
(太白星)
歳殺神

て西に伏す。その運行の方向は地球と同じである。

さて、この中で、木星を歳星と名づける。又これを大歳といつて、八將神の一つに數へ、毎年、年の十二支と同じ方位にめぐるとしてある。即ち子の年には子の方位に在り、丑の年には丑の方位にある。この方に向つては、公事、訴訟、争論その他、非義不正の事を忌み、之を犯せば、疫病にかかり、又、草を刈り、生木を伐ることを忌む習慣になつて居る。

金星は、太白星ともいひ、曆道では、歳殺神と稱へる。金の精は、勢ひの強いから起つた名である。この方位は、殺伐の氣に充ちたる所ゆゑ、萬事に恐れて避くることになつて居る。而して、そのめぐる方位は、次の表に示す通りである。

火星
(熒惑)
三年塞
の大將軍

年次 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

方位 未 辰 丑 戌 未 辰 丑 戌

火星は熒惑ともいつて、この星のめぐりに當る年は、兵亂、飢饉、疫病などや火災が多いとしてある。俗に三年塞りの大將軍といふのは、この火星のことである。そのめぐる順は次の如くである。

年次 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

方位 酉 酉 子 子 卯 卯 午 午 酉

この大將軍が、春夏秋冬及び四季の土用に五日づつ、他へ遊行して、不在の時があるから、その間に、その方位の正面を避けて、その左右を犯してもよいといふのは、如何にも滑稽な話である。

大將軍遊
行日

遊 春 (甲子の日東に遊ぶこと五日)
行 日 (己巳の日日本宮に歸る)

夏 (丙子の日南へ五日)
冬 (壬子の日北へ五日)
日 (丁巳の日かへる)

土星
(鎮星)
太陰神

(土用 (戊子の日中央(方位)に五日)
癸巳の日日本宮にかへる)

土星は鎮星といひ、又、太陰神といふ。嫁娶、臨産など、婦人に關すること用ふるを忌む。めぐる方位は次の如くである。

年次 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

方位 戌 亥 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉

歲破神

歲破神といふも、矢張土星の精で、太歲神の反對の方位に居る。太歲のために、つき破られるから、歲破といふのである。太歲が子の方に居る年は、歲破はその反對の午の方に居る。

水星は辰星といひ、又、歲刑神といふ。刑罰を司る方位であるから、萬事に用ひてはならぬとしてある。そのめぐる方位は、次の如くである。

水星
(辰星)
歲刑神

年次	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
方位	卯	戌	巳	子	辰	申	午	丑	寅	酉	未	亥

八將軍の起原

以上の太歳神、大將軍、太陰神、歳刑、歳破、歳殺に、黄幡と豹尾とを加へて、八將軍と稱へて、我國では、須佐男尊が稻田姫を娶りて生み給ふた八人の皇子であるといふ俗説があり、又、頗梨塞女の生んだものであるともいふが、これらは、皆附會説で、實は天の五星を主としていつたのである。支那の宋の時代の學者どもは、五星は、地の五行の氣が天に上つて星となつたものであるなどといつたともあるが、要するに、これらの説は何れも取るに足らぬ説で、木、火、土、金、水の氣の陰陽を、その年の方位の干支の陰陽と比べて、運氣論の上から、水と火とは尅するとか、木と土とは相生するとかいふやうな説を立てたものである。即ち天體に實在する星に五行を當て、吉凶

をとふやうになつたものである。

序でに金神の事を説明しよう。金神は、五行から割り出したもので、金の精の凝つたものであるとして居る。金はその性が殺伐の氣をもつて居るから、この方を犯すと、人の生命を奪ふなどいふのである。その種類には、色々ある。こゝには、俗に大金神と姫金神との年々の巡りやうを示さう。

大年次	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
金神方位	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申
姫年次	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅
金神方位	甲(子、午)	乙(丑、未)	壬(申、寅)	癸(酉、丑)	庚(辰、戌)	辛(巳、亥)						

これらの年は、皆金にあたる年であるから、金と金と相尅するため、祟りをするものが一層烈しく、又

戊(午,子) 己(未,丑) 丙(申,寅) 丁(酉,卯) 甲(戌,辰) 乙(巳,亥)

の午は、火にあたる年であるから、火は金を制するゆゑに、その祟りが少ないといつて居る。これは、例の陰陽の運氣論から來た説である。

北斗七星

北斗七星とは天の北極の方に當つて、七つの星が連なつて居るもので、第一から第四までの星を總稱して**璇玑**といひ、その次の第五から第七までの星を總稱して**玉衡**といつて居る。第一から第四までの星は劍の方になつて居て、第五から第七までの星の一連は杓の形に見立てゝ居る。而して、その第一を**天樞星**と名づける。これがいはゆる北極星である。第二が**天星**、第三が**天璣**、第四が**天權**、第五が**玉衡**、第六が**開陽**、第七が**瑤光星**である。この中の**天樞星**は陰陽の本原で、天をめぐつて、四方に臨むことが、恰も

北極星

斗建

月建

天子の如くであるとしてある。この星の尾が、正月の始めに向いて居る方位によつて、斗が**丑**に建つとか、**寅**に建つたとかいふので、又、月の朔の六つ時(今の午後六時)に、この劍の向いて居る方位によつて、その月の十二支を定める。これを**月建**と稱へて居る。

正月は、寅の方 二月は、卯の方

といふやうにめぐる。しかし、この斗の指す方位は、曆の基礎の處で説明して置いたやうに、地球の軸の變はるので、古と今とは、指す方位が違つて居て、近頃では、正月の暮六つ時の斗建は**丑**の方位になつて居る。世俗に、この星を祭つて、**齡**を延べ、**禍**を除き、**福**を求めるといふのは、實に謂はれないことである。

この七星の中の第七番目の**瑤光星**は**應星**ともいふ。俗に**破軍星**といつて、**金神**の一つにして、この方を忌むことにして居る。それ

(應星
破軍星)

七曜星

はその性が金で、その形が劍であるから來たものである。

七曜星 前の木星、火星、土星、金星、水星の五つに、日と月とを加へて、七曜星と稱へる。これを日に配して、善惡を卜ふことがある。即ち次の如くである。

日曜 大吉 この星に當る日は吉。又、この星の日に生れた者は智慧はあれども短命である。五月五日が、この星に當る年は豊年である。

月曜 大吉 五月五日が、この星に當れば、疾流行し、秋に霜が早く降る。

火曜 半吉 この星晝見ゆれば火災が多い。この星の日に生れた者は心がいやし。

水曜 半吉 この星晝見ゆれば、水害が多い。この星に當る日

に生れた者は智慧はあるが、病氣がちである。

木曜 大吉 この星晝見ゆれば、結婚が多く行はれる。五月五日が、この星に當る年は大豊年である。この星の日に生れた者は高い官位に上る。

金曜 大吉 晝見ゆれば、水難や火災が多い。この星の日に生れた者は、善を好む性質ではあるが、短命である。

土曜 大吉 五月五日が、この星に當る年は、土木が多く行はれる。晝見ゆれば早魘である。この星の日に生れた者は、朋友に信義をつくす性質である。

序でに記して置かう。西洋でも、生れた兒の將來を卜するに、その生れた日の七曜によつてする風習がある。日曜に生れた者は、幸福なもの。月曜に生れた者は、壯健で、火曜に生れた者は、

「富有。水曜に生れた者は幸福。木曜に生れた者は悲しみ事多く。金曜に生れた者は人を憐れむ心深く。土曜に生れた者は不幸な者であるといふことになつて居る。

九曜星 九曜星といふのは前の七曜に羅喉星と計都星とを加へたものである。元來羅喉は月の軌道(白道)が黄道と交叉する點(昇降交の點)で、計都はその白道の中點をいふので星では無いが、これを一つの星と考へて吉凶をいつたのである。而して人の生れた年によつてこれらの星にあたる年の吉凶を定めることが行はれて居る。たとへば、日曜星を一歳とし、月曜星を二歳、三歳を羅喉とする。而して、黒い星の年は凶で、半分黒い年は半吉、白い年は吉であるとして居る。次に一例を示さう。

日 ○ 一 十 金 ○ 六 十五

月 ○ 二 十一 火 ● 七 十六
 羅 ● 三 十二 計 ● 八 十七
 土 ● 四 十三 木 ○ 九 十八
 水 ● 五 十四

歳徳神

附記 俗に歳徳神といふのは、八將軍の母に當り、實は太陽のことをいつたので、前に示した七曜星の中の日曜星を指すのであるが、後には、陰陽の説をつけ加へて來るやうになつたのである。即ち十干の中を、陰と陽に分けて、甲、丙、戊、庚、壬を陽の干とし、乙、丁、己、辛、癸を陰の干として、陽の干にあたる年は、その干にあたる方位を明きの方と稱へて、萬事に用ひて大吉の方位とし、この方に向つて、正月元旦に神詣てをするのを、惠方参りといふのである。又、陰の干にあたる年は、乙なれば、甲の方位、丁なれば、壬の方位、己なれば、甲の方

明きの方

惠方参り

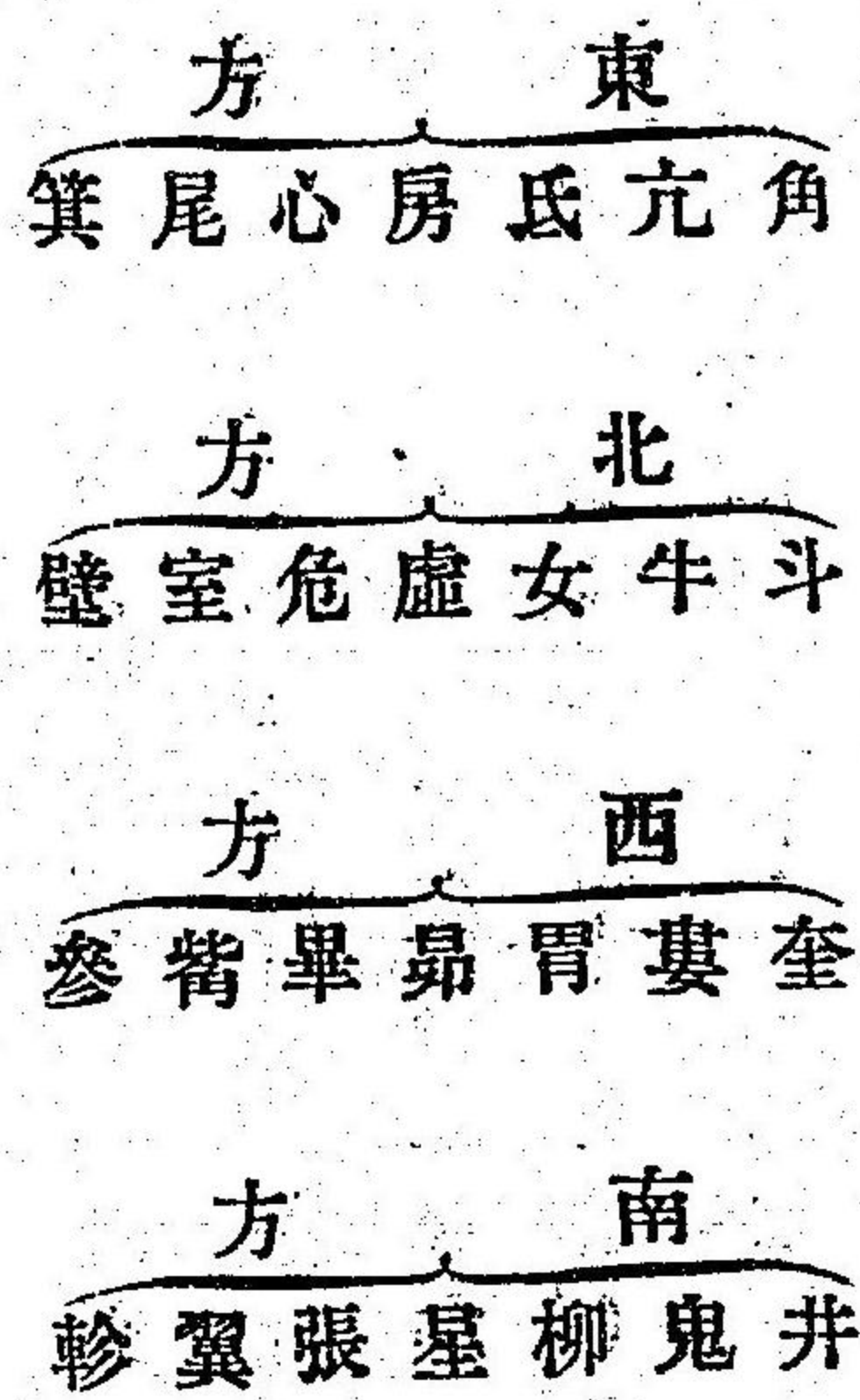
位、辛なれば丙の方位、癸なれば戊の方位にあたるのである。

- 甲の年 寅卯の方 乙の年 申酉の方
- 丙の年 巳午の方 丁の年 亥子の方
- 戊の年 戌卯の方 己の年 卯酉の方
- 庚の年 申酉の方 辛の年 巳午の方
- 壬の年 亥子の方 癸の年 戊丑の方

これによつて一例を示せば、明治四十三年は庚戌の年であるから庚の年は、申酉の方が(明きの方)に當るのである。

二十八宿 これは、地球の軌道の周圍を二十八に分けて、その一つづつを宿又は舍と名づけたもので、その各宿に當つて見える星に、それの名をつけて、次のやうにいつてある。つまり、人が旅行をするに、その一つの宿から次の宿へ進んで往くやうに、地球がめぐ

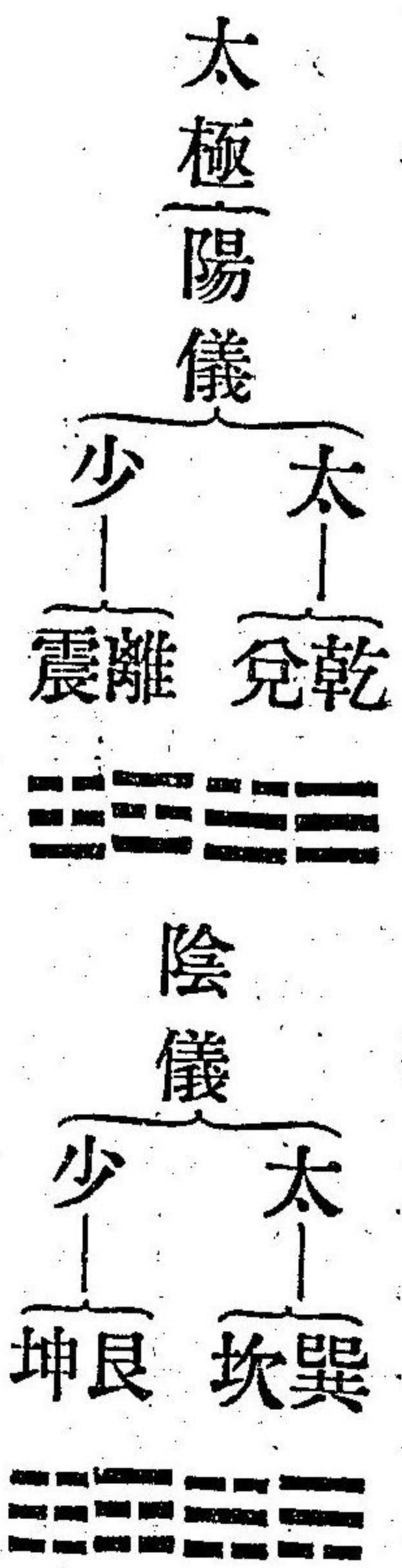
二十八宿



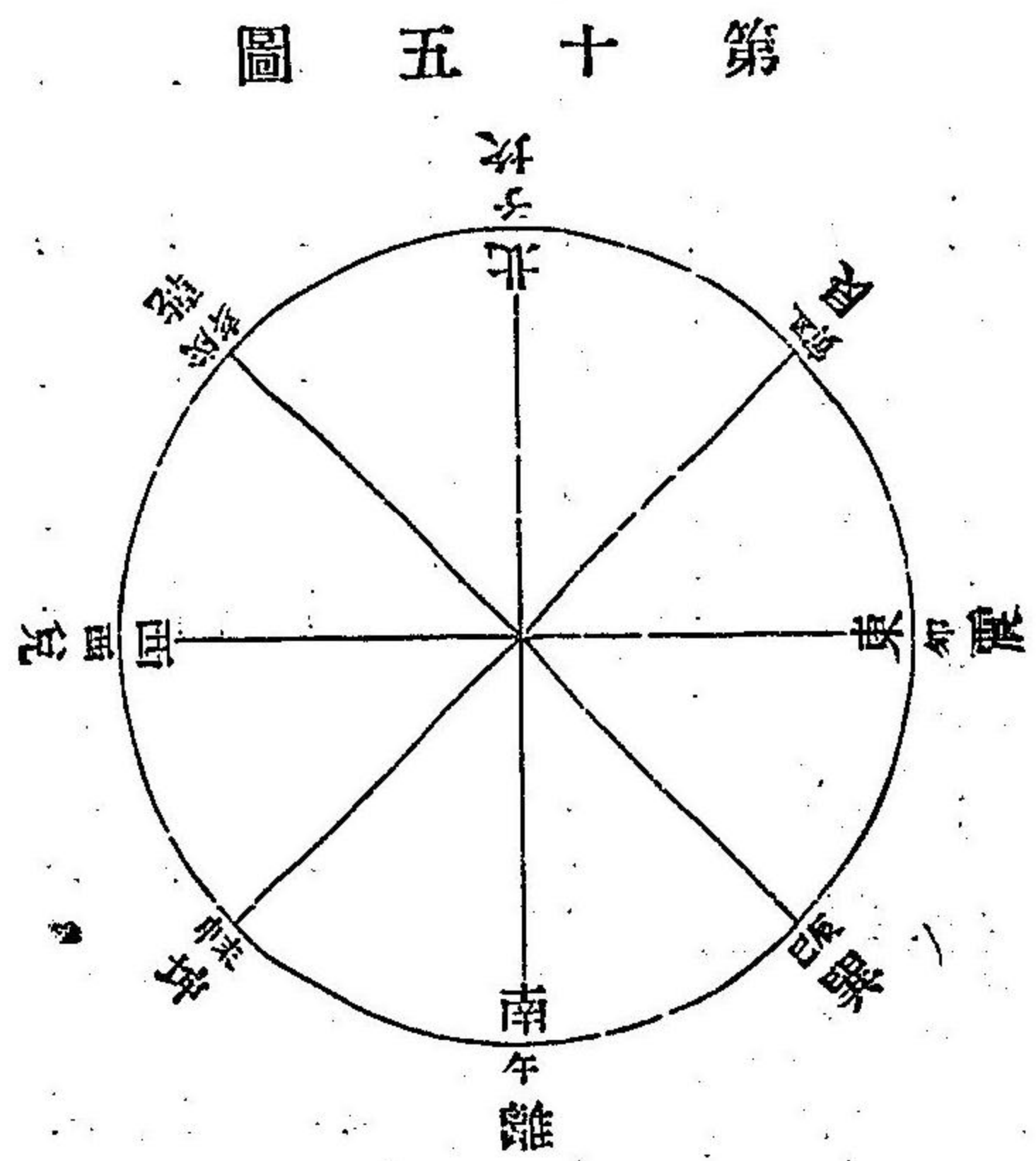
る度をよく了解させるには便利なものであるが、之を以て吉凶を判ずるといふが如きは、根據のないことである。古い曆の、年の下に、宿値何々とするは、其年の始めが、二十八宿の何れの宿にあたる年であるといふことを示したものである。同じく月の下に記してあるのは、二十八宿の何れの宿に、其月があたるかを示したもので、更に日の下にまで記してあるのは、日々の宿を示したのである。(卷首挿入の明治五年壬申頒曆参照)

五行干支に關するもの

支那では、古くから陰陽の説が行はれて居て、世界の物はすべて、この陰と陽との二つの氣の配合から生じたものであるとした。この陰陽といふものは、陽は明るく、高く、剛く、暑く、陰はこれの反對で、暗く、低く、柔かく、寒くといふなうに、相對したものである。陽にも太陽と少陽とあり、陰にも太陰と少陰とがあつて、八つになる。易の八卦といふのは、即ちこれである。



五行といふものは、萬物を生ずる元素のやうなもので、木、火、土、金、水の五つである。之を次のやうに配當する。



八卦配當圖

乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤
天	澤	火	雷	風	水	山	地
金	金	火	木	木	水	土	土
戌亥	酉(西)	午(南)	卯(東)	辰巳	子(北)	丑寅	未申

この八つを、方位や、實物に配當すると次の如くなる。

星	方位	時季	色	數	八卦	
木	歲星	東	春	青	三、八	震
火	熒惑星	南	夏	赤	二、七	離
土	鎮星	中央	季	黃	五、十	艮
金	太白	西	秋	白	四、九	兌
水	辰星	北	冬	黑	一、六	坎

この五行の氣は、年々めぐりつて、互に相生じ相尅するものがある。特に人間は、五行の正氣を受けて生れたものであるから、この氣に順ふときは吉であるが、逆ふ時は禍を免れないとして、吉凶をとふやうになつたのである。今五行の氣が和合すると、相尅するとの理を示すと次の如くなる。

相生相尅

木は火を生じ	火は土を生じ	土は金を生じ	金は水を生じ	水は木を生じ
水は火を尅し	火は金を尅し	金は木を尅し	木は土を尅し	土は水を尅し

共に大吉なり
共に大凶なり

この相生相尅の理は、人間の性質から、年、月、日、時などにわたりて應用せられて、悉く吉凶があるのである。

千支の根原

千支 十干と十二支とは、五行の配當から出たもので、運氣論にも、十干、十二支、五運、六氣などは、皆五行から立て、交々その用をなす。天にあつては氣となり、地にあつては形となる。その天の氣は、甲干から始まり、地の氣は子支から始まる。そこで、甲と子とが相合して、つぎつぎに順を立て、六十歳にして一循し、これを日に配當

するものもある。そこで(壬)は妊と同じく「ばらむ意」(癸)は揆と同じで、芽を萌す用意をする意である。

十二支の意義

十二支

子は北方で、陰が極まつて、一陽が始めて生ずること、恰も婦人が妊んで子となると同じである。☷^陰☰^陽のかたちで地雷復の卦にあ

たる。これを月にあてると十一月である。

丑は陰がまだ、その子を結んで助けて居る意で、未だ陽の春にはならぬ。即ち十二月である。☷^陰☷^陰の象で地澤臨の卦である。

寅は、冬より、いよ／＼春の陽氣に移る時で、寅といふ字の音は演と同じで、事の始めを述べるといふ意である。又渡り場といふ意でもある。☳^陽☳^陽の象で地天泰の卦にあたる。月でいへば正月である。

卯は二月に當り、日が升る時である。又卯は茂るといふ意で、二月は陽氣が盛んで草木が茂るからである。その卦の象は、☳^陽☳^陽雷天大壯にあたる。

辰は震といふ意で、三月にあたり、陽の氣が漸く盛んになつて、物が震動して生長する意である。卦の象は、☳^陽☷^陰である。

巳は全く陽ばかりになつて陰がなくなつた時で、その象は、☰^陽☰^陽の卦の如くである。又巳は起る意で、物が盡く起るともいふのである。月にあてると四月になる。

午は陽の氣が未だ屈せないのに、陰の氣が始めて生じた時で、五つが陽で、一つが陰の卦、☰^陽☷^陰天風姤にあたる。又午は長ずる意で、五月に至ると物が皆長大するからである。

未は六月にあたる。木が枝葉を重ねて味がある時節である。そ

こて未の字は木の上の一つを添へてある。卦の象は、 天山道である。

申は身と同じ音で同じ意味である。即ち秋になれば物が成熟して體が成る意である。その卦は、 天地否て、月では七月の初秋にあたる。

酉は日の入る時で又萬物が秋の半ばであるから收斂する時である。月では八月に當り、 風地觀の卦である。

戌は滅する意で萬物が皆衰へる時である。月では九月にあたり、卦は、 山地剝て、陰の氣が五つまであつて陽が一つあるのみである。

亥は陰氣ばかりで萬物を効殺する意である。月では十月にあたり、 の重坤の卦である。

六十支

十干を十二支と配合すると六十支となるから、之を年に當てるときは、六十年で、一回循環することになる。その干支の異なるに従つて、各性質が違つて居る、これがいはゆる納音といふものである。而して、ある年に生れた者があるとするれば、その人の性質や、一代の吉凶は、その年の干支の性質によつて定まるものとするのである。次にその納音の表を示さう。納音といふことは、音はその物の聲で、金の聲とか、木の聲とかいふやうなもの、納は、受けるといふ意で、即ち聲を受けるといふ意味なのである。

甲子	乙丑	海中金	戊辰	己巳	松木	壬申	癸酉	銅金
丙子	丁丑	潤下水	庚辰	辛巳	銀金	甲申	乙酉	井泉水
戊子	己丑	竈火	壬辰	癸巳	長流水	丙申	丁酉	山頭火
庚子	辛丑	壁土	甲辰	乙巳	燈籠火	戊申	己酉	大澤土

九星

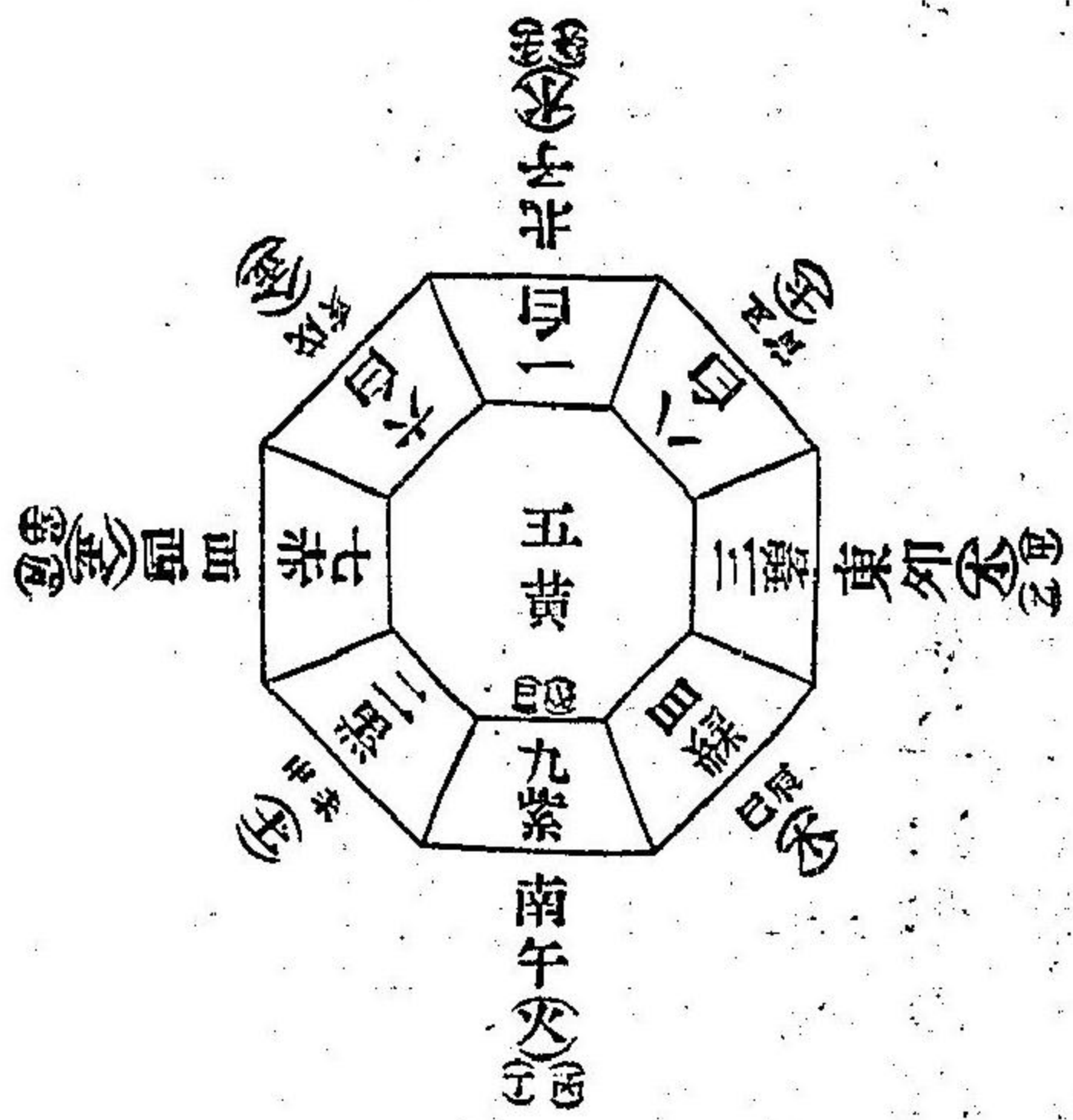
壬子 癸丑 桑 木 丙辰 丁巳 砂中土 庚申 辛酉 柘榴木
 丙寅 丁卯 爐中火 庚午 辛未 路傍土 甲戌 乙亥 葬 火
 戊寅 己卯 深山土 壬午 癸未 楊柳木 丙戌 丁亥 屋上土
 庚寅 辛卯 松柏木 甲午 乙未 砂中金 戊戌 己亥 平地木
 壬寅 癸卯 鐘 金 丙午 丁未 池 水 庚戌 辛亥 劔 金
 甲寅 乙卯 水澤水 戊午 己未 天上火 壬戌 癸亥 大海水

此等の性質は、その下にある實物の名で、判断が出来るであらう。
 附記 九星は、もと五行から割り出したもので、星の名てはない。
 支那の古い時代からあるもので、一から九までの數を、縦、横に配置
 して、總和が十五になるやうにしたものである。之を年や、月や、日
 及び時に配當して、五行の相生相尅の理によつて吉凶を判断する
 のである。

九星方位配當

九星循環

第十圖



九星の圖

九紫が中央にあつて、次に示すやうになる。

六	四	八
二	九	七
一	五	三

一白(水) 二黑(土) 三碧(木)
 四綠(木) 五黃(土) 六白(金)
 七赤(金) 八白(土) 九紫(火)

之を四方に配當すると第
 十六圖のやうになる。
 この星は、年々時々循環
 する。その順序は、たとへ
 ば、九紫の星にあたる年は、

その翌年は八白が中央になる如く、九八七六五四三二一九の順にめぐり、その他の處は、六は五となり、四は三となり、一は、また始めの九になる。

七	三	五
六	④	一
二	四	九

九星の根原

この九星の根本は、曆の上元即ち甲子の年を一白として逆にめぐることにしてあるから、その次の乙丑の年は九紫となるのである。近い頃では、元治元年が甲子の年で、下元の始めてあるから、明治四十三年は九紫が中央に當る年である。

本命的殺

本命といふのは、その生れた年の中央の星をいふので、餘程大切なものとしてある。人の性質は、その本命によつて定まるからであ

る。又、その方位は決して犯してはならぬとしてある。又、的殺といふのは、その本命に反對の方位で、之を犯すと生命に關するともまていつて居る。たとへば、四緑木星の生れのは、本年は、この星は南に當るから、その反對の北が的殺になるのである。若し中央に當る年は、いはゆる八方的殺である。月にも日にも、年と同じやうに、この九星がめぐることにしてあるが、煩はしいから、すべて省くことにする。

日時の吉凶に關するもの

十二直

十二直 曆の中段には十二直といふものが配當してある。これによつて、その日の吉凶を知るのである。十二直とは、

たつ萬物を生ずる日なれば、新しき衣服をたち、柱を建て初め、旅行等に吉。但し土を穿ち、舟に乗り、藏を開くは凶。

のぞく萬の凶を殺ひのぞく日、煤拂ひ等に吉。結婚、旅行、井掘な
どは凶。

みつ庫に萬の寶を積む日。家を建て、結婚、移轉、旅行には吉。
たひら結婚、移轉等に吉。種蒔などには凶。

さだむ建築、結婚、移轉、下人を召し、牛馬を求め、土を動かし、祈禱を
するには吉。訴訟、旅行には凶。

とる建築、種蒔、井を掘るに吉。移轉、旅行に凶。

やぶる正月の寅より七つ目に當り申の日にて、相向ひて闘ひ、申
が寅に破られるといふより、やぶるといふのである。出
獵などには吉なるも、その他には凶。

あやふやぶれたる翌日であるから危いといふので、結婚、建築、種
蒔などには吉であるが、高い處に上り、馬、船に乗るのは凶。

なる結婚、旅行、入學、移轉、種蒔などに吉。訴訟には凶。

おさむ入學、結婚、建築、移轉などの物を買ひ入れるに吉。葬儀、旅

行には凶。

ひらく萬事に吉。但し葬儀その他の不淨の事には凶。

とづ萬事に凶。墓を立てるにはよし。

十二直の
根原

の十二で、その根本は、正月は、北斗の劍が寅の方位に建つ日である
から、正月の寅の日を「建」として、それから順に、のぞく、みつと配當す
る。二月は、卯の支にあたる月であるから、卯の日を、十二直のたつ
にあて、その次の辰の日を「のぞく」とする。このやうにして、月々
に配當するのであるが、毎月の節に入る日は、躍るといつて、節に入
る前の日のまゝを、節の日にあてるのである。假令ば明治四十一年
年正月四日が正月の節であるから、その前の三日が、たつに當る故

十二運

四日もたつとするのである。

附記 十二運 十二運とは、次に示す如きものでもと五行家の説で、たとへていへば、木性のものは、申に氣を受けて酉に胎んで、戌に養はれて、亥に生れて、子に沐浴して、丑に冠を帯び、寅に官途に臨んで、卯に王となり、辰に衰へ、巳に病んで、午に死に、未に葬るといふ意である。この中で、胎から王までの間を有卦とし、それより後を無卦とするのである。有卦の年に當れば吉で、無卦の年の間は凶である。その繰り方は、人々の生れた性によつて違つて居る。

有卦無卦

胎、養、長、沐、冠、臨、帝、衰、病、死、墓、絶

八專

八專 八專といふのは、日の干支の配合から來たもので、十二日の間に、十干の中の木の性のものと、水の性のものと、十二支の中の、木の所と水の性とのものが、重なり合ふ日が八日あるので、これを八

間日

專といつたのである。たとへば、

壬の子の日(水) 甲の寅の日(木)

は壬の水と、子の日の水と、甲の木と、寅の木とが相重なるがやうなものである。壬の子の日から、癸の亥の日まで十二日の間を八せんとして、その中で、丙の辰、戊の午、壬の戌、癸の丑の日は、干と支との性が重ならないから、これを間日と稱へる。一年の中には、八せんが六度あるから、合計七十二日ある筈である。この八せんの間は、陰陽の氣が偏して居るので、多くは雨天である。この日は、礎を据ゑ、柱を立て、棟上などには吉であるが、結婚や物を賣買したり、神佛の事などには用ひて凶としてある。世俗に、照り入り八せん「降り入り八せん」といつて、八せんに入る日に雨が降れば、八せん中、日和よく、八せんの入りが照ると、八せん中雨が降るといふのは、謂はれ

のないことである。試みに明治四十三年の八せんに入る日を算出すると、次の如くなる。

二月十六日 四月十七日 六月十六日 八月十五日

十月十四日 十二月十三日 (以上新曆)

十方暮
天一天上

十方暮と天一天上 八專の中で、十干と十二支との五行の性質が全く反對(尅)する日である。即ち甲の申の日より、癸の巳の日までの十日の間である。干支が相對して、天氣が不和の氣でみちて居るから暮といつたのである。たとへば、甲の木は、申の金とは性が合はない、癸の水と己の火とは、性が合はないやうなものである。但し、十日の間で、丙(火)の戌(土)の日と、己(土)の丑(土)の日とは、性が合つて居るが、全體が相尅する時であるから、矢張、十日の内に入れたのである。この十方暮の終りの日が癸の巳の日で、即ち天地が晴れ

犯土

犯土とは、干支の性が土と土と相重なる日をいつたもので、

て、よき日であるから、之を天一天上の日といつて、天一神(地の星の精)がこの日に天に上つて、これから、十六日の間、天の諸方位をめぐり、己の酉の日に下界へ下つて、四十四日の間、四方をめぐるといふのである。そのめぐる方位は、次の如くである。

庚戌日より甲寅日まで五日間 艮の方

乙卯日より己未日まで五日間 東の方

庚申日より甲子日まで五日間 巽の方

乙亥日より己卯日まで五日間 西の方

庚辰日より甲申日まで五日間 乾の方

乙酉日より己丑日まで五日間 北の方

乙丑日より己巳日まで五日間 南の方

庚午の日から七日の間を大犯土とし、丁丑の日を間日とし、更に、戊寅の日から、七日間を小犯土と稱へて、この時に竹木類を伐れば、蟲がいたりといつて居る。要するに、土を犯してはならぬといふのである。

庚申

庚申は、何れも金の性で、その氣が盛んな日で、この日に、萬物が改まるといふのである。我國では猿田彦の神であるとか、又、佛家では青面金剛であるとかいつて居るのは皆附會説である。道家にて、この日に、人の體内に、三尸といふ神が居るのが、天に昇つて、その人の罪科を天帝に申し上げるのであるといふのは、これも取るに足らぬ説である。この夜、男女の交接を戒めること、庚申待といつて、酒宴をするのは、一般の風俗になつて居る。この庚申の日は、八せんの入りから九日目である。

三伏日

日の吉凶

三伏日 夏至に入つてから、三度目の庚の日を初伏、四度目の庚の日を中伏、五度目の庚の日を末伏といつて、これを合せて三伏といふのである。夏は火の勢ひが盛んで、庚の金の氣も、これに伏せられるので、これを恐れつゝしむといふ意味である。故に、これも、直接に時節に關係するものではない。曆の下段には、日々の吉凶を記してあるが、その吉日といふのは、多くは、陰陽の氣の配合のよき日で、悪日といふのは、陰陽即ち干支の性が相尅する日である。試みに、これらの中で、著しいものゝ二三を擧げて示さう。

大明日 陰陽和合の大吉日。

鬼宿日 これは二十八宿の中の一つで、この日にあたる時は大吉日としてある。

正月十一日 二月九日 三月七日 四月五日 五月三日
 六月朔 七月二十五日 八月二十二日 九月二十日 十月
 十八日 十一月十五日 十二月十三日
 天赦日 干支相生の日で、大吉日である。

春 戊寅の日 夏 甲午の日 秋 戊申の日 冬 甲子の
 日
 母倉日 萬よき日、これも干支の性の和合より來たのである。

春 子の日、亥の日 夏 寅の日、卯の日 秋 辰の日、丑の日、
 戊未の日 冬 申の日、酉の日
 春の木と子、亥の水とは相生ずるといふやうに配當したので
 ある。

五墓日 五墓といふのは、十二運の中の墓の運にあたる日で、五

行の氣の歸する處であるから、名づけたのである。

○ 戊辰の日 壬辰の日 丙辰の日 辛丑の日 乙未の日

○ 世俗に、この日に葬式を行へば、墓を五つ列べるといつて忌む
 のは、文字から來た迷信である。但し、この日は土を動かすこ
 とは忌むのである。

○ 黒日 大悪日

○ 正月 戌の日 二月 辰 三月 亥 四月 巳 五月 子 六月 午 七
 月 丑 八月 未 九月 寅 十月 申 十一月 卯 十二月 酉
 大不成就日 (曆の日取以外の悪日)

正月 七月 三、十二、十九、二十七。二月 八月 二、十、十八、廿六。三月
 九月 一、九、十七、廿五。四月 十月 四、十二、十九、二十七。五月 十一、
 月 五、十三、二十一、二十九。六月 十二、月 六、十四、二十二、三十。

これは正月、七月などの奇数は陽であるから、三日とか十一日とかの同じ陽とが重なつて来るところから、このやうなことをいつたのであらふ。

六曜星

六曜星といふのは、元來、星ではない。その根據は確とわからな
いが、世俗に行はれて居るのは、次の如きものである。

- 先勝日 正月七月 萬事早くするが利。午後は悪ろし。
- ⊕ 友引日 二月八月 相ひいて勝負なき日。朝夕は善し。
- 先負日 三月九月 静かな事には吉、午前は凶、午後より善し。
- 佛滅日 四月十月 大悪日、病にかゝれば長びく。
- 大安日 五月十二月 大吉日、旅行、結婚、移轉、店開きに吉。
- 赤口日 六月十一月 悪日、萬事に用ひて凶。

この星の繰りやうは、正月ならば、その月の朔を先勝日と定めて、友



年中行事

引、先負と順に、日に配當して、赤口日から、再び先勝日にかへるやうにするのである。これで、この六曜日の根據がないことが知られる。

* * * * *

年中行事は、昔と今と、宮中や、上流社會と、一般の民間に行ふものは、多少違つた所がある。これらを一々述べることは煩雜でもあり、また、世間によく知られて居るところであるから、こゝには、その中で、必要なものだけを擧げて、説明することにしよう。

一月

四方拜

一日 四方拜 宮中にて行はせらる。これは、天皇、伊勢大神宮を始め、天神地祇、四方の諸神社、神武天皇、孝明天皇の御陵を拜し、皇靈殿、神殿を拜し給ひ、寶祚の無窮、年穀の豊穰、國家の安泰を祈り給ふのである。

民間にては、門に松竹を立て、しめ繩を飾り、其他、神棚を始め、倉庫、背戸、井、竈、湯殿、厠などにも、松を立て、しめ繩を輪にして飾り、床には、

蓬萊島

三方臺に、齒朶や、ゆづり葉を敷いて、その上に、鏡餅を供へたり、又、別に、海老や、熨斗や、鰻や、昆布、蜜柑や、搗栗、串柿のやうなものを盛りて、供へ置きて、祝ひの客が來ると、之を供へて新年を祝する。これが蓬萊島とも、口祝とも、くひつみともいふものである。

惠方詣

先づ、朝早く起き出て、若水といつて、新らしく井から水を汲み上げて、それで顔を洗つて、歳徳神を拜し、又、日の出を拜し、後に、屠蘇を飲み、雑煮餅を喰ふのである。それから、惠方詣りといつて、明きの方位にあたる神社などに詣でる。又、氏神にも詣でる。此夜、寶船の圖を枕の下に敷いて寝るので、寶船の繪を賣りあるく。これは、初夢を見るためである。昔は三十日(大晦日)の夜の夢を初夢とした時もあり、二日の夜の初夢とした時もあるが、今では、一般に二日の夜のをいふことになつて居る。

初夢

門に松竹を立てるのは、風霜に冒されざることをおやかつたもので、床の飾りのゆづり葉なども同じ意味である。海老や鰻などは、中古奈良朝、平安朝時代に、好んで料理に用ひたものであるが、海老は、腰の屈むまでも永らへるなどの意味が加はつて、縁起のよい物として、祝ひの料理などには必ず用ひることになつたのである。

屠蘇

屠蘇は、支那から傳はつたもので、昔ある人が、毎年大晦日の夕方に、藥一貼チヨウを、その里の家ごとに贈り、袋に入れて井の中にひたさせ、元日に水から取りあげて酒樽に入れ、名づけて屠蘇酒といつて、之を飲めば、疫病にかゝらぬといつた事がある。屠といふは、邪氣を絶つことと、蘇といふのは、人の魂をよみかへらせるといふ意味である。一説には、蘇といふものは、惡鬼の名で、この藥が、

それをよく屠チり割カくといふことである。

我國では、嵯峨天皇の弘仁年中に始まるといふことである。屠蘇を飲む順序は、年の幼いものから始める風習になつて居る。これは、幼い者は、今から漸く壯んになるので、歳を加へることが、芽出度いが、老人は、年を一年づゝ減じて死に近づくから、先には、飲まないといふ意味からである。

齒固

元日から三日の間は、雑煮餅を喰ふ。これを齒固ハゲタメともいふ。もとは、齒固とは、元旦に、猪の肉など堅い物を喰ふ儀式であつたが、これは、齒は、人の命とするものであるから、命をかためて延ばすことを祝ふたのである。その遺風が鏡餅や雑煮餅を喰ふことになつたのであらう。鏡餅といふのは、形が鏡に似たため、雑煮とは、色々な野菜や、魚類などを雜せて煮て、餅の汁にするから

戴餅

である。
餅は昔から福のものとして、あるから之を用ひるので、宮中では、之を福生菜フクシヨウサイと呼ばれたこともある。

元日に戴餅イダキといつて、五つになるまでの小供には、今朝餅を頭上にいたゞかせて、官位が高くなるやうに、命幸かたかれと祝ひ言して、その餅で、三度頭をなでることが行はれた時代もあつた。元日より三日が間は、室内を掃除せず。これ新たに來る陽氣を拂ひ出さゞる意味であらふ。

書初

書初といつて、文字を書きて歳徳神に供へる。これはいはゆる試筆である。今では二日に行ふやうである。此夜は早く寝ねて吉き初夢をみることにしてある。これは、大晦日の終夜の疲れを慰するためであらふ。

元三

この日を元三といふ。これは、元旦は年の始め、月の始め、日の始めであるからである。

事始

二日 事始めて各業を始め藝を試みる。文字を知る者は文字を書き始め、詩や和歌を作る。商家では、店を開いて賣り初めをする。初荷といつて、貨物を車に積み、馬に背負はせ、飾り立て、得意の店から店へ贈る。

元始祭

三日 元始祭 宮中では、皇祖皇宗の諸靈を祭りたまふ。本を忘れ給はぬためである。

政治始

四日 政治始め 天皇内閣に臨御し給うてもろくの政治を聞きしめし給ふ。民間では、鏡開きといつて、神棚などに供へてあつた鏡餅をちろしてきるのである。これは、時代によつて、日時が違ふやうである。消防出初式も、この日に行ふ。